

特集 水の文化 **楽習**プログラムを考える

水の文化



「水の文化」

平成13年2月

第7号

CONTENTS

特集 水の文化 楽習プログラムを考える

水の文化 楽習プログラムとは 3

- 水の文化とは
- 水の文化 楽習と環境教育の違い
- 水の文化 楽習プログラムづくり
- 水の文化 楽習プログラムの創り方・遊び方

水との原体験を伝える環境 楽習 7

- ～教育と体験のあいだ～
- 東京農業大学長 進士 五十八 氏
- 千葉大学園芸学部助教授 赤坂 信 氏
- 環境計画山道省三アトリエ代表 山道 省三 氏



琵琶湖博物館から琵琶湖を臨む

関わりを育んだ「ホタル調査」 15

- 滋賀県立琵琶湖博物館 研究顧問 嘉田 由紀子 氏
- 水と文化研究会 事務局 小坂 育子 氏

特集 水の文化 楽習プログラムを考える

人々は「E エコロジー」「M マーケット」「C コミュニティ」の視点を組み合わせ「水の文化」をイメージし解釈している。これが、昨年の自主研究「くらしと水の多様な関係」（機関誌『水の文化 第4号』）で得られた仮説でした。

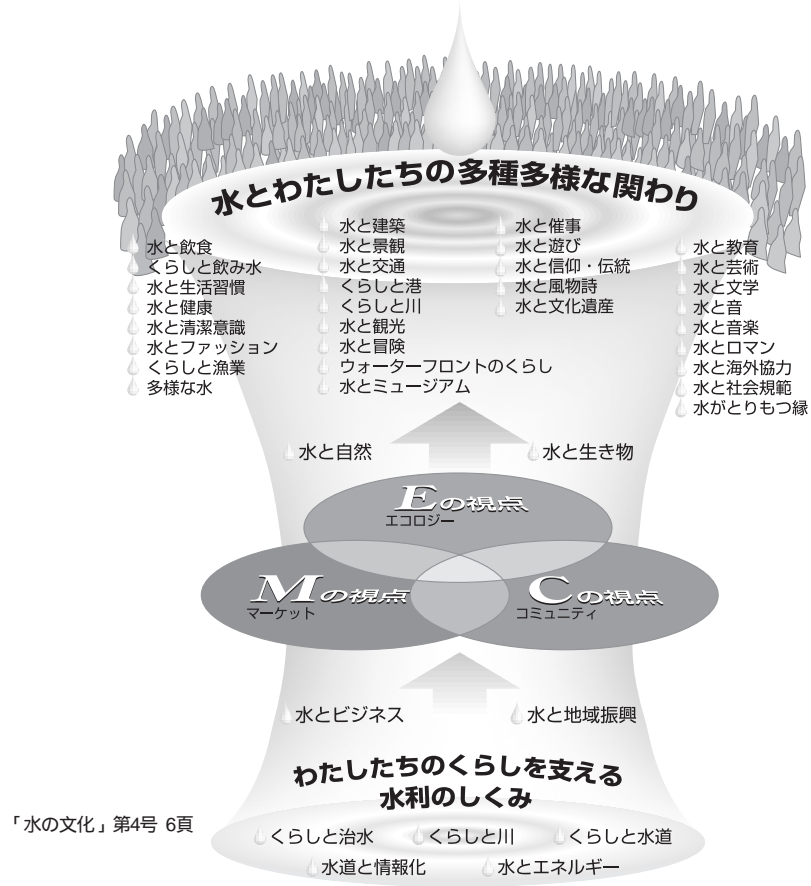
今回はこれを踏まえ、当センター流の「水の文化」の捉え方の見取り図に取り組んでみます。そして、この「水の文化」をできるだけ多くの方々に伝えるための手だてについて考えてみたいと思います。しかし、それを教育といういかにも堅苦しい。私達が望むのは、都市や各地域で、家族や子供達が水をモチーフにしたプログラムで、交流を育み、歴史を刻んでいってもらうことです。そのためには何よりも楽しいこと。つまり「遊び」の要素が重要と考えました。そこで、こうした楽しい水の文化が広がっていくプログラムを「水の文化楽習プログラム」と名付けました。

このプログラムは、生態系における水のみを重視するものではありません。つまり、今の日本で使われている意味での「環境教育プ

ログラム」とは違います。また、私たちは、都市と地方の関係を、連続した一つのものとして考えています。都市が地方に依存しているように、地方も都市に依存しており、その多様な関係は神経網のようです。この複雑な関係の中で水を重視することも重要です。

当センターがこれまで「人と水とのつきあい」という言葉で表してきたことは、生態系における水と社会システムにおける水の両面を、歴史と空間、そしてそこに暮らすひとの視点から捉えようということと言えます。

水の文化楽習プログラムは、こうした意味での「人と水とのつきあい」を楽しく伝承し、交流していこうという実践的な活動術といふべきものです。こうした視点から活動が行われている例はけっこう多いとは言えないようですが、少しずつ「水の文化」を伝えることの重みが認知されつつあることも事実です。当センターでは、今後、水の文化楽習プログラムづくりに取り組んでいく予定ですが、まずはじめに、今回はこのプログラムの考え方をご紹介いたします。



水の文化楽習プログラムとは

水の文化へのこれまでの取り組み

「水とひとのくらしとの関わり、すなわち水の文化を『水と交流』『水と生活』『水と心』『水と共生』という四つの領域で捉え、ひとがどのように水とつきあってきたか」について検討する。当センタ―では、このような視点から水の文化をできるだけ広く捉えてきました。

たとえば、創刊号で取りあげた「香川の溜池の配水慣行」や、3号で取りあげた「筑後川の淡水取水」は、それ自身、土地独特の水の文化であると同時に、水という共有資源のためにいかに関係者の間で協力していくかという、共有資源管理の、ホットな話題の実例でもありました。

また、創刊号と第5号で取りあげた「舟運から見る都市の水の文化」は、川・海や舟運がいかに都市の構造や住宅のしくみ、すなわちひとびとのくらしに影響を与えてきたかということを追跡した、「都市における水の文化の解釈学」ともいうべきものでした。

このように「水の文化」は、生活とすべての面で密接に結びついているものです。このため、社会システムにおける『水』の役割（マーケットとコミュニケーションの視点から捉えた水）と、生態系における『水』の役割（エコロジーの視点から捉えた水）を、歴史・空間・そこに暮らすひとの視点から総合的に捉えることが必要なのです。

水の文化楽習と環境教育の違い

では、この「水の文化」。具体的にはどのように伝えればよいのでしょうか。

水の文化は人、もの、出来事などに埋め込まれています。表1に挙げる様に、私達は水の文化に関わるさまざまなアイテムに囲まれて暮らしています。それぞれのアイテムには人・もの・出来事の情報埋め込まれています。これを、歴史・空間・ひとの視点から掘り起こし解釈していくのです。

例えば、現在「川」をテーマにさまざまなプログラムが作られています。「川で子供達がシャケの稚魚を放流」「川辺にビオトープ作り」「上流の森林ハイキング」……。これは生態系としての川をさまざまな側面から捉えているわけです。一方、わたしたちは社会システムの側面からもアイテムをイメージ・解釈し、眺めています。社会システムの中で「川」は別の顔を見せてくれます。交通

路、物流路としての川、治水施設、水道の取水口、排水口。川の周囲の土地利用。河川敷を利用したレクリエーション。川を巡る言い伝え……。これらは歴史の時々での川との関わりの中で作られたものとして捉えることができるでしょう。時間がたつと、個々のアイテムの関係も変化しますし、社会システムと生態系との関係も変わってきます。川というアイテム一つとっても、こんなにも



おもしろい情報が埋め込まれ、それらが相互に網の目のように結びついているのです。

これらをもに次の世代に伝え、考えてもらうプログラムは現状ではあまり見られないようです。生態系における水、社会システムにおける水をそれぞれ独自に扱うものが圧倒的に多いのです。このため、水の文化を形作る数多くのアイテムのそれぞれの関係を、横断的に考えるプログラムも少なくなっています。

表1は、本誌第4号に挙げた水の文化に関するキーワード一覧です。身の回りのアイテムをどのように切り取るかが腕の見せ所です。

水の文化楽習プログラムづくり

それでは、「水の文化楽習プログラム」とはどのような要素を満たせばよいのでしょうか。本センターでは下図の様な四つの切り口を考えています。

「水を伝える方法」「水を見る視点」の他に、「水を伝える方法」としての楽しさ、その結果いろいろなストーリーやイメージを膨らませる物語性そして、できるだけ多く、多様な方々が継続して交流できる「参加性」。こつとした要素を満たしたプログラムを創りあげていきたいと、当センターでは考えています。

水の文化楽習 プログラムづくりの切り口

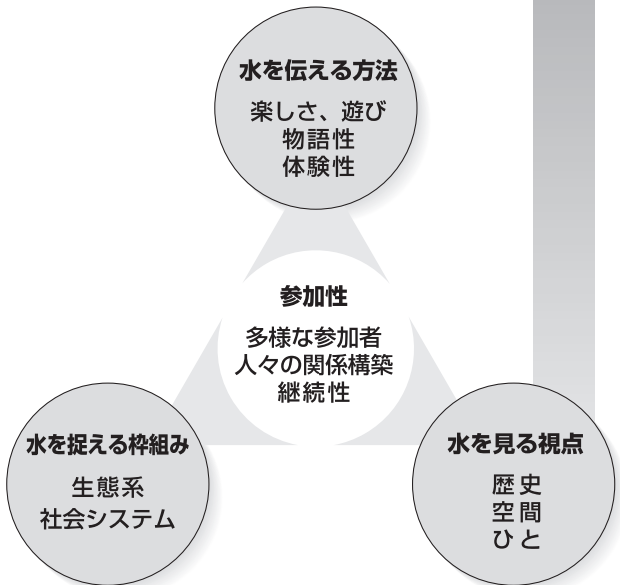


表1 水の文化に関するアイテムのキーワード一覧

キーワード(五十音順)	記事の掲載内容例
ウォーターフロントのくらし	臨海都市、海岸
くらしと川	川、流域
くらしと漁業	漁業、養殖、漁村保全、漁師
くらしと水道	上下水道、井戸、水源涵養林、雨水利用
くらしと治水	ダム、堰、河川修復
くらしと飲み水	浄水器、水質浄化、魔法瓶、雨水利用、ミネラルウォーター
くらしと港	港町、ヒットソング
多様な水	深層水、イオン水、水の栄養
水がとりもつ縁	漂流物、雪などを通しての交流
水と遊び	釣り、ヨット・カヌー等、海水浴、潮干狩り、スポーツ、テーマパーク、水遊び
水とエネルギー	発電、節電
水と生き物	魚、昆虫など水と生き物、水と生き物によるまちづくり
水と飲食	酢、酒、寿司、茶、ミネラルウォーター
水と音	水琴窟、漏水、鳴き砂
水と音楽	ヒットソング、音楽
水と海外協力	水質浄化・淡水化等産業協力、NPOなど多様な団体の海外協力
水と観光	流水、潮干狩り、温泉、川床、クルーズ、水晶の洞窟、水筍、雪の大谷
水と教育	自然の教育力、環境教育、資格(ビオトープ管理士、気象予報士)、マナー教育
水と景観	親水空間、景観、公園、景勝地、噴水
水と芸術	絵画、写真、水中写真、演劇、彫刻、オブジェ、染め物
水と健康	温泉、治療、癒し、プール、スポーツ
水と建築	庭園、都市空間、噴水、雨水利用、実験住宅、橋
水と交通	くらしと舟運、河川舟運、災害時の代替輸送、船、運河、航路
水と催事	イベント、シンポジウム、祭礼、スポーツイベント、懸賞催事
水と社会規範	マナー、慣行、法律
水と自然	環境保護一般、森林保全
水と信仰・伝統	宗教行事、祭礼、婚礼、沐浴
水道と情報化	下水道管の利用
水と生活習慣	入浴、トイレ、洗濯、銭湯
水と清潔意識	トイレ(蛇口、洗浄便座)
水と地域振興	水を利用した地域おこし、まちづくり
水とビジネス	商品、開発、サービス業(銭湯など)
水と風物詩	灯籠流し、笹舟、祭、川床、ひな流し、山開き、漁解禁
水と文化遺産	建築遺産、遺構、史料、無形文化財、自然遺産
水と文学	文学、俳句、川柳、活字資料
水とファッション	容器のデザイン(飲料水、酒)、つけ涙、化粧品
水と冒険	雪原、カヌー、ヨット、丸木船、水泳、海底調査
水とミュージアム	水族館、様々な水を題材にした博物館
水とロマン	探検、文学、旅行、漂流物

各地の楽習活動を、次号より取材・連載してまいります。
「自分の活動を紹介したい」、「こんな活動をしている団体がある」等、楽しい情報を当センター東京事務局までお知らせ下さい。皆様からの連絡を「こころよりお待ちしております。」

電話 03(57662)0244
FAX 03(57662)0246

水の文化 楽習プログラムへの創り方・遊び方

はじめの一歩

楽習プログラムづくり それは、人をまきこみ、楽しませるシナリオづくりです。何が楽しいのか自分がわからなければ、他人に伝えられません。これから始まるのは、「自分の住むまち」を題材に想定した、ある物語です。

水の文化センターの研究スタッフAと、今は高校の教師になっている大学時代の同級生B、そして、地方でまちづくり活動に参加し、今はそのNPOの事務局長になっているCが、久しぶりに会って居酒屋で話し込んでいます。

A このあいだ、こんな手紙をもらったんだけど、どう答えたらよいか困っているんだ。知恵かしてくれない？

Q はじめまして。私は、ある地方都市で小学校の教諭をしています。子供達に何とか自分たちのまちの自然や文化を伝えたいと思うのですが、具体的にどうしたらよいかわかりません。良い方法を教えてください。

C ふーん、いまだにこんな質問が来るのか。こんな質問を手紙にする前に、まず、思い立ったが吉日。街の中をぶらついてみ

ればいいんだよ。「何をするかテーマが決まってから」「目的を決めてから」…こんな重苦しいことを考えると動けないからね。

B でもさあ、自分も教師だから、この質問の意味はよくわかるよ。「環境教育」が大事ということで本屋に行って事例集を見てみるんだけど、これがつまらないんだ。(笑) それと、こちらとしては、生徒の親や地元の人を巻き込みたいと思うんだけど、お互いなかなか忙しくて時間がとれない。積極的な先生は、地域のリーダーになりそうな人たちと日頃からコンタクトして活動しているけどね。

C NPO活動をしていく時の基本は、まず地域にどんな資源があるか、その洗い出し。目的は分かっても、実現するための資

源がどこにあるか分からないとそこで活動はストップしてしまうからね。自分達も、学校の先生や商店街の人たち、お医者さん、老人会、行政の人たち、多くのボランティア、大学の先生、いろいろな人と組みながら、子供や親向けの社会教育活動をよくするけれど、意外と自分が住んでいる街のことってみんな知らないよね。水道はどこ

の川から来ているのか、排水はどこへいくのか、井戸がまだ使われているのか、どこにあるのか、あのうっそうとした林はいつからあるのか、昆虫が少なくなっているように思うけれど本当にそうなのか、住居の形態は他と違うのか、家同士のつきあい方は現在とどう違うか：いくらでも調べるこ

A フィールドワークの整理や、企画のA

アイデア出しをする時に、思いついたことや記録をメモやカードに書いて、よくまとめるけど、そいつのは使えない？

C よく使うよ。自分ならまずこうするな。お医者さんが患者のカルテを書くように、いま自分たちの街がもつ水の文化は何があるのか、書き出してカード化してみるといいよね。「水の文化カード」だ。いわば、まちの水の文化資源データベースだ。

そこには、たとえば、「船着き場」なら、船着き場と題名を入れて、いつからあつて誰が作って、昔はどのような使われ方をしていたとか何でもいいから書いていくわけ。それと大事なものは、そのことについての情報源。たとえば、「昔は、ここから渡し船が出ていた」なんていう話を聞いたら、それが何歳の誰から聞いたか。あとは、それ

たということとは距離が離れたということ？

化カード

場所

松江市内

太郎 (38歳) 二郎 (8歳 小学校2年) 親子で記入

デジカメ記録



き活かした城の立地

こと。な。があることを聞く。という。今度調べてみることにする。

水を活かしたまちづくり

町で育ったはどのように描写されていたのだろう

について詳しい人。たとえば、ある学校の社会の先生が専門的に舟運史を研究しているとか、市の博物館の学芸員の人が詳しいとか。これらを書いておくと、水の文化に関する、「もの、人、こと」の情報源データベースになるわけだ。

B それを生徒たちと探検してまとめてみると面白そうだな。いや、生徒だけではなく、生徒の家族も一緒にできそうだな。カメラも持って、写真も貼り付けてみるという。やはり、大勢の人間でやった方がおもしろいよ。

C そうそう。自分達のNPOは、会報発行の他に、メーリングリストももっているから、お父さんお母さん達がそこで井戸端会議をやっている。そこで、そういう情報をみなさんから募集するという手もあるよね。ホームページで、みんなが撮った写真を公開してもおもしろい。

A ウンウン。その通り。でも、そこまでなら、ただの調査だよ。それを、どう学習プログラムにしていくなけ。

C そこが腕の見せ所さ。「自分たちの街の水の文化を伝えていこう」とかまずテーマを立ち上げて興味をもった人を募る。そして第一回のミーティングを開くんだけど、そこで必ず「飲み食い」をする。やっぱり人間って、食べてリラックスすると、なぜかお互いの信頼関係が何となく生まれて頭が回転し出すんだ。そこで、おもむろに、みんなで集めた水の文化カードを大きいテーブルの上に並べて、わいわい、がや

なぜ？ 観光化された生活と舟運の

水の文化

件名	堀川の遊覧船	
調査日	2000年 7月27日	メンバー: 林
内容 (誰に聞いたか、何を調べたか、気づいた点)	<ul style="list-style-type: none"> 水都松江を象徴する堀川の遊覧船に乗り、船頭さん (58歳) からお話をうかがった。 松江城の周囲の内堀と、外堀の役割を果たしていた京橋川・米子川・四十間堀川を通り、約50分で1週している。 運行が始まったのは1997年1月。意外と新しい。今は、年間乗降客50万人を越える観光名所となっている。 始まる前は、かなり水が汚れていたとのこと。 途中、船一隻がやっと通れる橋の下の小さなトンネルを、8人位の乗客が全員かがくぐったのは面白かった。 川からの眺めがきれい。これを活かした景観が守られ、まちづくりが活発。 昔は堀をたくさんの船が行き交っていたと小泉八雲邸も川のすぐ側。八雲も同じ風景を見ていたのかもしれない。 船頭さんから「ホーランエンヤ」という祭り。松江大橋のあたりにたくさんの川船が集まる。 	

どういう意味？

ギリシャの島に生まれ、英国ダブリンの港小泉八雲の作品に、水都松江の風景

がやしやべりながら、「これとこれはつながるね」「これは私の田舎の船と形が違う」「じゃあ、こんどそこへ行ってみようか」とかね、「調べたものを、商店街の人たちにもついでにいたら、来週の商店街のイベントで掲示板を出すから、貼って発表してくれ」なんていうのもあるしね。

A なるほどね。つながることが大事なわけだな。テーマもそう。人もそうだね。

C そう。一人で調べるならこつこつ調査勉強すればいいんだよ。でも、思いがけない発想とか、活字になっていない情報を発掘するには、やっぱりみんなでわいわいやりながら、情報を共有していくことが必要なんだ。そういうことをやると、次の調査の時は「分かっている質問する」ことになるから、相手も余計に興味を持って聞いてくれることになる。

B それよくわかるな。それと、教師の立

場から一言いうと、わいわいやりながら学習すると、人によって気づきがある。これは年齢関係なし。おもしろいことに、お年寄りの方から同じ話を聞いても、生徒に報告させると、個人によってニュアンスの置き方が違ってくる。当然だよ。いままでも何となく、頭の中でもやもやしていたものが、話を聞いて考えることではっきりと気づくようになる。このプロセスが本人も面白いんだね。だから、最初から「カリキュラム」をかつちりと決めるとだめね。むしろ、気づきのプロセスを大事にして、「おもしろければ途中でどんどん変更しよう」「ぐらいの気持ちで臨むと、長続きするんだらうな。

A 世代をつなぐことも大事なんだな。

C そう。なんとなく地域の人たちが世代を越えてつながってくる。すると、だんだん活動が盛り上がりつつくるんだ。

ポイント 1

フィールドワーク カード化

【フィールドワーク】

まず、みんなの情報を文字化して共有しよう。人によってこんなに解釈が違うのかと驚くはず。

ポイント 2

みんなで楽しく、組み合わせる

【テーマのデザインと気づき】

ここでブレインストーミング。カードを見た感じきをどんどん書いてアイデアを出し合おう。

ポイント 3

とにかく、つながりまくる

【ネットワーキング】

テーマをつなげる、人をつなげる、できごとをつなげる、とにかくつながりまくる。すると、いろんな関わり合いが生まれ、グループが活発化する。

interview

水との原体験を伝える環境楽習

教育と体験のあいだ

水の文化をトータルな空間感覚から捉え、まちづくりや環境学習活動に取り組んでいる人々がいます。かれらの名は造園家。「体験としての自然をいかに設計するか」という、自然と工学のあいだを橋渡しするのが仕事です。今回は、東京農業大学長の進士五十八氏、風景論が専門の赤坂信氏、NPOを中心とした環境学習活動に携わっている山道省三氏に、それぞれの視点での「水と楽習」について語っていただきました。



山道省三氏

環境計画 山道省三アトリエ 代表
全国水環境交流会 事務局長

1949年生まれ。東京農業大学卒。75年、環境計画山道省三アトリエ主宰、77年、(財)とうきゅう環境浄化財団専任研究員(96年退員)、94年、東京農業大学農学部総合研究所客員研究員、2000年、特定非営利活動法人多摩川センター副代表理事、特定非営利活動法人地域交流センター理事。

主な著書に
『東京の川』1996年(地域交流センター 共著)
『ともだちになろうふるさとの川 - 川のパートナーシップハンドブック2000年度版』2000年(信山社サイテック 共著)
『多摩川をモデルとした「河川環境」の保全に関する住民参加型の手法・制度についての調査・研究』2000年((財)とうきゅう環境浄化財団)
『水辺の楽校をつくる』1997年(ソフトサイエンス社 共著)など。



赤坂 信氏

千葉大学 園芸学部 助教授

1950年生まれ。山形大学農学部林学科卒。千葉大学大学院園芸学研究所造園学専攻修了(修士)、78年に西ドイツ給費留学生としてハノーバー大学へ留学。81年に千葉大学助手を経て90年より現職。農学博士(京都大学)。自然公園論、都市緑地史、近代ツーリズム研究、森林観の国際比較、ドイツの郷土保護運動、ヨーロッパの環境運動史を専攻。91年『ドイツ国土美化の研究』で日本造園学会賞受賞。現在、地元千葉県における江戸時代の幕府直轄の「牧」(野生馬の放牧地)跡にある「野馬土手」の保存とこれを現代に生かす方法を模索している。

主な著書に
『森林をみる心』(共立出版)
『森林観の変遷と環境認識』(講座「文明と環境」第14巻/朝倉書店)
『森林風景とメディア』(遠い林・近い森/愛智出版)
『スカイライン問題と都市緑地の存在理由---眺望の発見と育成のために---』(新・町並み時代学芸出版)など。



進士五十八氏

東京農業大学長
東京農大地域環境科学部造園科学科教授
(農学博士/造園学・環境計画学・景観政策学)

1944年京都市生まれ。東京農業大学農学部造園学科卒業。1987年東京農業大学農学部教授。1988年より地域環境科学部教授、現在に至る。1995年農学部長。1998年地域環境科学部長。1999年東京農業大学長、現在に至る。日本造園学会会長、日本都市計画学会理事、国土審特別委員、都市計画中央審専門委員、東京都景観審副会長、新宿区・豊島区景観審会長、毎日新聞社持続可能な社会創造委員会委員など。

主な著書に
『水の造園デザイン』1978年(誠文堂新光社)
『緑のまちづくり学』1987年(学芸出版社)
『アメニティ・デザイン -ほんとうの環境づくり』1992年(学芸出版社)
『水辺のリハビリテーション/現代水辺デザイン論』1993年(ソフトサイエンス社)
『ルーラル・ランドスケープ・デザインの手法』1994年(学芸出版社)
『風景デザイン -感性とボランティアのまちづくり』1999年(学芸出版社)ほか多数

水をめぐる市民活動

まず、山道さんと水との関わりについてうかがえますか。

山道 私は東京農大の造園学科を卒業した後、多摩川をフィールドとする民間財団の研究員になりました。そこで初めて都市中の川に触れたわけですが、もともとは九州は長崎の小さな田舎町で育ち、子供の頃は川遊びをした「川の原体験派」です。遊んだ頃は、昭和三十年代の前半です。

昭和三十年代の終わり、東京オリンピック以降の頃ですけど、高度成長期が始まり、都市河川の問題、特に水質汚濁が深刻になりました。それを処理する能力が、都市にもまだなかったし、水利用も非常に多くなり、水量と水質の悪化がいつぱんに川に押し寄せてきた。今の私のフィールドである多摩川は、そういう病巣を抱えた川であつたわけです。それに加えて田舎でも都市でもそうですが、川は、地域の人にとつての身近なレクリエーションの場であつたわけですね。特に子供にとっては自然と触れ合う場所でした。

東京オリンピックで日本が惨敗をし、「欧米のようにもっと体力をつける場がなくてはいけない」ということで、当時の建設大臣の号令のもと、そういうものを作るうとしたのですが、土地がない。地価高騰もあり、都市ではスポーツ施設やレクリエーション施設を作る余裕もない。一般に開放できる、本格的な野球場や陸上競技場をたくさん造るわけにはいかないわけですね。

そこで、河川敷にそういうものを求めようという動きが、昭和四十年に始まります。多摩川と荒川と江戸川の河川敷で、民間の企業が占有していた所を開放しようという動きで、第一次河川敷開放計画といえます。

そこでグラウンドや公園などが造成されるようになりまして。このため、河原とか、水際の湿性植物とか、そこに集ってきた生き物とか、それが失われることになってきた。そこで、昭和四十六年（一九七一年）頃から、「川の自然を守るつ」という動きが出てきたのです。「自然を守る派」と「スポーツ・レクリエーション派」が、自治体と企業を交えて多摩川を舞台に様々に動き、それは、今日まで継続を続けています。

この三十年間、公園やグラウンドを自治体を作り、市民に開放してきたわけですが、やはり、川のじかの自然を復活させたい、ということになってきたわけです。建設省河川局が主導して、スイスやドイツなどの多自然型工法などを導入し、水辺を含めた自然を川の中に作るようになり、全国的に展開されるようになってきたわけです。こうした動きの背景には、自然を求めようという社会情勢の変化もあつたと思います。自然を復元し、守り、自然を活用した利用を目指そうとなつたわけです。

さて、そこで、昭和三十年代後半頃に川で遊んだ「原体験組」が、全国でやあら注目を浴びてきた。なぜなら、とにかく川での遊び方や親しみ方を知っていますから。そこで、われわれはそういうことを住民のレベルで行なうていこうとしているわけです。地域それぞれに川があるわけですね、

その中で子供達や地域の人達に、川遊びや自然観察、もっと言えば魚釣りや泳ぎ方、おぼれた時にどうするかとか、ちゃんとした教育のカリキュラムに載っていないけれど、自分達の体験を活かして教えたり、一緒に遊んで伝えたりする仕事が多くなってきた。これに河川政策と文部科学省の政策がのりつつあるわけですね。平成十四年

(二一 二年)から実施する予定の総合学習と関連をもたせながら、地域の中でそういう川遊びのリーダーを育てようという動きが出てきます。そして現在、市民団体が、キャリアを持った人達の人材やノウハウを、行政とのパートナーシップの形で活かせるような仕組み作りを模索している段階です。地域の人達は指導者としての教育を受けたわけではないのですが、皆さん、遊びの先輩達から学んだことなどを世代間の交流を通して、いろんなノウハウをご存知なわけです。それは、自然についての話しだけではない。例えば、地域の洪水に対する対応の仕方とか、あるいは水をおいしく安全に飲むためのノウハウとかね。様々な総合的な学習をしてきたわけです。

自分たちも楽しんでる

赤坂 今、世代間の交流についての話が出ましたが、トンボとかホタルを川に戻そうという活動などがありますよね。子供の環境教育のためと言っていますが、やっているおじさん、おばさん達は、非常に喜んでやっていますよね。自分たちも楽しんでるんじゃないかな。

山道 ええ、喜んでやっていますね。

赤坂 その中で、やはり「教えなきゃいけない」というのではなくて、「こんなに楽しかったんだよ」と、子供達に直接話をする。やはり、それがいいとね。「教えなきゃいけない」とか、学校教育の枠でやるよりはいいと思います。

山道 自分達も一緒に楽しむということが大事だろうと思いますね。「昔、川遊びをしていた連中というのは、ほとんど勉強しないで遊んでいた(笑)」というのがあつてね、何かそれが活かせないかというのが、どこかにあるんですよね。まあ、それは社会貢献という面でもあるんだけど、そういう遊びを支援してね、「そうだ、そうだ」と誉めてあげようという役割をしたい。われわれの組織全体として「いっしょに遊ぼうよ」と呼びかける役割ですね。

赤坂 励ますわけですね。

山道 そうそう。そういう仕掛けまでできあがったらいなと思っています。教えている連中は、サバイバルというか、生きるノウハウのようなものなど、いろいろな大事なものを持っていると思うんですね。それが、きわめて強烈なエネルギーになっているかな、という気がしますね。そういう地域で一生懸命やってきた方々のパワーを、次の世代が引き継ぐことができればいいなと考えています。したがってカリキュラムとか、遊びのメニューはね、川ごとに違つ

それを集まって議論すると、すごく面白い。赤坂 例えば、釣りや山菜採りやキノコ採りする人達とかは、自分で見付けたポイントがあつて、それをなかなか家族にも教えないということがあるようです。僕は、釣りにしても山菜採りにしても潮干狩りにしても、現在に残された「狩り」のようなものだと思うのです。まったく野生のものでしょう。そこで野生との対話のようなも



のが生まれる。だから太古以来、続いてきているのかなとも思う。特に、潮干狩りなどは、裸足で入っていきますよね。そこで、水の匂いがして、泥や土の感触が足の裏に伝わってくる。それを専業でしている人達もいますが、多くの人は「遊び」という形で太古以来の経験をそこで再現している、そんな気がしますね。

山道 川のスケールというのは、個人が知っている川によって、全然違うということも確かにある。「源流まで行ったことはないけれど、中流のこの部分については、俺はスペシャリストだ」という人もいる。けれど、河口だと源流までは、なかなか行かない。数キロとか十数キロとかの川なら、かなり行ったり来たりできるのだけれど、北上川とか利根川とかのスケールになってくると、そうはいかない。ただ、その分、いろいろな人材がその地域におられるんですよ。みなさん、「この川は俺の川だ」という自負が強いものだから、なかなか市民同士の交流がうまくいかないケースもあるんだけど、でも今は、上下流交流を一緒にしている。彼らにとっても次々発見をしていくという喜びもあるんですよ。

今、「水環境交流会」では北海道から沖縄まで活動を展開しています。地域によって川の体験や学習が違う。洪水の出やすい川とか、その出方も違う。生き物も違うし、生態や景観も違う。今、我々が全国の中で声をかけているのは大体二万団体ぐらいです。実質動いているのは、約千六百団体です。数人のレベルの団体から数百人のレ

ベルまであります。北海道から沖縄まで、ほとんどの川に少なくとも数団体ははりついています。清掃活動とかドブさらいとか、トンボやホタルだけやっている人達とかね。進士 『水辺の楽校』(注1)はいま何校に なっている。

山道 百七十〜百八十くらいです。計画中の所もあるので正しい数字は分かりませんが、多摩川ではやっと一箇所です。これは、地域の受け皿や受け取り方によって異なります。「あえて、水辺の楽校はなくても、もう、自分たちでやっているよ」というのがあ

る。その受け皿について、詳しく教えて下さい。

山道 地元の人達と自治体が協力をしてそれを維持運営をしていく仕掛けまで作ろうというわけです。そこで、リーダーも地元の漁師さんとか、そういう方になってもらいたい。そこまで踏み込んで制度化する必要があるのかと思います。自治会や住民有志、学校の先生方、地域の自治体の担当者達と協議会を作ります。それが運営部隊になっていきます。だから運営は地元の人達で行なっています。これが特徴です。

環境教育と

楽しむことのギャップ

進士 環境問題の深刻化で、水や緑、生き

物の回復、それにミティゲーション(注2)へと話がすすんでいるということです。これは全ての国民の関心事だということです。特徴は、担い手が中年だということ。原体験があつて、川で遊んだ世代だということだけれど、ほんとはおそろしく、次世代の体験欠乏症への危機感でもある。

今の子供達は、田んぼでも森でも河原でも遊ばないので、子育て上危機的なんです。そこで、文部科学省は、環境教育や総合的学習の時間で、もう一回そういう体験をさせようとしているわけです。ただ、近年盛んに言い出した環境教育は、学校関係者の緻密な単元単位のプログラムにしてしまつて、「とてもつまらないもの」になってしまつたので、その辺も本当は考えなければいけないのです。

学習を「楽しい」という字を入れて楽習にする意味は、語呂合わせ以上に大事なことでしょう。それぞれに楽しくやろうね。学習では教育的な感じがしすぎます。でもつくづく思うのは、学校教育の問題です。環境教育と、楽しむことの間には、たいへんなギャップがある。

山道 われわれは、まず「教育」するという言葉を使つたんですが、次に「学習」となり、「遊ぶ」になって、最後に「楽校」になりました。

進士 昔、「遊学」という考え方がありました。遊学だと、ただ海外に遊びに行つても、国内でも、要はトータルに体験型で学ぶことであつた。生物学とか芸術とかに分

かれない「博物学」的な考え方が基本に流れているべきです。ですから、それは意外に大事だと思えます。楽しいかどうかは本質的なことだということです。ただ楽しく教わって学ぶ程度とか、ちょっと冗談入れれば、それで楽しいというぐらいに思っている。でも、そうではないんですよ。

それこそ水の本質の話になるのですが、身体ごと環境を味わうとか、環境の中に暮らすとか、環境に浸るといふほどのことが必要だと、私は思います。まさにそういう意味で、原体験、本当に体験をした人たちが、体験をたどってプログラムを作ることが大事だと思う。だから、私の教育論の根本は「体験の強制」でいいと思ってるんです。「大人が思っていることを子供に押しつけてはいけない。だけど体験することだけは強制しない」と、クルト・ハーン（注3）は言っています。それが、ものすごく大事なことだと思う。

私は環境教育学会が出来て十年間、運営委員をつとめました。教育の専門家は新しいプログラムを作ろうとやって、みんな考える。でも、何が新しいのか。そんなことはない。別に新しくならなければいけないわけではない。自然体験や文化体験というのは、私らが体験したことを、また次の世代が体験していけばよい。今の世代が同じことをするのはちっともおかしくない。人間の生活ですからね。

赤坂 「今ある情報が正しく新鮮で、ちょっと前の情報は古くて誤っている」 そう感じると、体験が積み重なっていかず、全

部捨てていくようになってしまいます。おじさん・おばさんが子供達を連れていくという話が出たけれど、おじさん・おばさんたちが子供の頃の舞台となった川がもうないでしょう。これが大きな問題だと思う。どこかに連れて行ってやらなくてはいけません。縁もないような場所、教えてやるような形になるかもしれない。まあ、ピクトーみたいなものをこさえてみて、そこでやっていく。だから水環境というのが昔のものではまったくくないですね。

山道 それが、川の人達が自然復元を叫ぶひとつの動機なんですね。単純に自然が戻ればいいというのではなく、過去の原体験を再現する場を作っていきたいというわけです。例えば、多摩川は、単純に言えば、町の中に原っぱがなくなった。なくなったから河原に行って遊んでいたけれど、川原の原っぱもなくなってしまった。そういう単純な動機で自然保護運動が始まったんですね。

川は地域の共有財産

進士 基本的に治水一筋というのが、昔からの河川行政の根本です。そんな河川治水利水から親水、環境用水へと変わっていったということ。しかも国主体から市民を巻き込む河川行政参加論へと、川に関する運動が盛り上がりつつあるということです。

これには二つ理由がある。一つは、山道さんから市民サイドの自然発生的盛り上がり。もう一つは河川行政の変質です。治水、利

水一本槍から、親水とか環境用水、近自然工法、多自然工法、伝統工法の再評価、河川法の改正で、市民参加を大前提にできたこと。さらに最近では、「水循環」概念をとり入れ始めたのです。

河川行政は水を引き、洪水を防ぐために、川と対処してきました。それを、日本の国土の水循環という概念を、きちんと認識しましょうということなんです。とんでもないのは、国土レベルで水循環を本気で考える行政組織がないんです。歴史的には、国土レベルでは河川行政が行つべきで、都市レベルでは都市計画の分野、環境省は水質だけです。その河川行政が国土交通省に



進士五十八他著『風景デザイン』学芸出版社 1999年

(1) 川遊びのリーダーを育てまちづくりに結びつけようという、国土交通省と文部科学省が協同で行っている事業。
(2) 緩和を意味し、開発を進めながら自然環境を保全する手法を指す。

(3) 英国の教育学者(1886-1974)で、知的活動とともに体育を強調する実践活動を行ったことで知られる。

入り、洪水防止から水循環まで範囲を広げてきた。もう一つは都市との関係です。これまでは、まちの中を川は流れているけれど、都市づくりとは無縁だったわけです。行政のタテ割と河川アンタツチャブル主義でしたからね。しかし過密都市の中で、河川の意味を考えると、都市計画の重要な資源でしょう。環境保全上から見て、オーブンスペースとして見ても、景観から見ても、そういう空間が今までは独立していた。そこで、最近の行政は、水循環という概念を用い、また、「沿川型まちづくり」とでも呼べるように、まちづくりそのものに重要な役割を河川が持っていることを打ち出してきた。国民的な関心の高まりと、行政の、市民を意識した対応の柔軟化の両方が相まって、河川行政と、河川をとりまく市民活動のコラボレーションは、かなり一般化してきたと言えるでしょう。もう一つは都市の人工化が、川という環境資源、今までは川は国のものだったわけですね。それを放っておかなくなった。国の川を市民が自分達の手に取り戻そうとしているわけです。

山道 それは法律にも出ています。新河川法で、川は地域の共有財産という表現がされています。河川法の改正で、河川計画を都市計画として作るつもりです。河川区域とまちを一体化した整備、あるいは流域全体での水循環を考えるとしています。ですから、洪水が起きた時の対応として、市民が自衛するように仕掛けていく。お互いの役割分担をしながら被害を少なくするという、減災のための方策とか。そういう検討が始まっています。

農の風景

川を今まで単機能として見てきたものを、やっと多機能として見られるようになったということですね。

進士 その。多面的、総合的というか。機能という言葉はあまり好きではないが、ほんとは環境文化空間としての河川、環境文化としての流域ですね。ただ、もう一つ大事なことは、水空間は河川だけではない。湖や池や沼などたくさんある。いろんな水の生き物緑地で活動は活発化している。

茨城県の「宍塚大池」の会というグループが環境保護とそこに親しむということ。いろいろな活動をしています。池や沼、それと水田、谷戸田。谷戸の自然を保護し利用する市民は、鎌倉の山崎谷戸とか、横浜の舞岡谷戸でも盛んに活動しています。谷戸田には小川が流れている。谷戸の里山からのしぼり水です。だから谷戸は川の源流部とも言える。川だけ見てはいけな

い。川の側には河畔林があつて、その内側には田圃があるわけです。そのちよつと上にいくと谷戸になる。谷戸の両側には雑木林。真中には田圃があつて、そこに小川が流れる。川としてみれば、谷戸川はちよろちよろとしたものです。でも、その流れと雑木林と水田がワンセットで、貴重な里の自然と文化圏を構成している。これが、中山間地になると棚田の問題にもなるわけです。河川から谷戸、そして里山へと、環境風景全体といつてもいい。それから、逆に、横浜でいえば大岡川のカヌーとかで海へもつながる。また逆は、雑木林とか谷戸とか私の言葉では「農の風景」に展開する。川に注目して、最初川で遊んでいた人が、だんだん上流に上がったり、下流に下ったりして、海や山へ関心を広げていく、途中の農村にも関心がゆく。川はそういう広がりを与えたという点も注目すべきですね。

「農の風景」と「環境風景」というのが、キーワードですね。それをもつ少しうかがえますか。

進士 「農の風景」というのは、「二次的自然」とか、「中間的风景」といつてもいいでしょうね。昔、「中間論」とか「適正規模論」とか、「ほどほど」「分相應」とか、いろいろありました。だいたい日本では両極しか、一般の人々の話題にはならない。日本の社会文化では右左・黑白をはっきりするのが好きですから。

赤坂 水に親しむといつても恐い恐い自然

ということ、何とか水から遠ざけようとして一生懸命やってきたわけです。しかし、今はどういうわけか、「親水」という言葉が生まれるくらいですからね。本当に向きが変わってきたわけですけれど。まさに恐い自然と人間との間に、バッファーを作るといふ、結果的にそういったものが農の風景の一つ。まさに手なずけた自然のシテムというものを、自然と自分達の生活の間に造る。たいていそれは、素手で自然に立ち向かっていた時代に造られたものです。例えば防風林や防雪林があります。川の流れもそうです。近代以降だけでなく、いろいろな工夫があつた。農の風景というのは、そういう中間、マジナルな部分ということでしょう。だから、土地、土地でいろいろな特色が出てくる。

進士 まさに、近代は両極だけしか認めない時代です。プラスがマイナスかなら、とても分かりやすい。効率でものを考える社会というのは、そういうものなんです。そういう社会では、過密都市の緑化が、国土保全での自然保護の話題ならとりあげられるが、中間自然の農村は注目されない。それが「農の風景」で、二次自然と言います。プライマリー(primary)な野性的自然ではなくて、セカンダリー(secondary)なやさしい自然なんです。人間が手を加えて家畜化して、人間生活に有用なものにしたものです。

「農の風景」の価値は家畜的自然として人間に有用でやさしい環境の象徴だということ。それに、人類、民族の「原風景」と



して「農」や「水」のある風景は、「生きられる景観」であることです。工業のようにものすごく最先端をいくものと、野性的な自然に価値を置く自然保護運動とは両極で、その中間は農業なんです。中間領域は、実は一番広くて大きい。

しかしそういう領域は両側から少しずつ崩されてしまう。農の風景というのは、自然的なもの、人工的なもの、歴史文化的なもの、それに現代を感じる農業機械、例えばカントリーエレベーターのようなものも全部複合している複合景観ですから、非常に難しい。しかし、そこをきちんとできれば、都市の問題も自然の問題も解決できるヒントもあるわけです。農の風景の中に人間の知恵、日本人の知恵が全部入っていると思う。

水とのつきあい方も、水神様、神社には神様の池があるでしょう。それから、うちの前には川が流れているし、それを引き込んで庭で鯉も飼うしね。山田、棚田はじめめ利水は、一筆書きで、田圃を全部潤すシステムを造っているしね。洪水対策、水防団システムもあるでしょう。水源林を造るとか、河畔林を造るとかもそうです。農村には、そういうソフト、ハードの知恵が全部入っている。それを戦後工業文明の発想は全部無視してきたんです。そういう意味で、もう一度「農の風景」に的を絞ってみたい。特に、地方都市には、まだ田園景観が身近にある。フィールドとして生かせませぬ。なのに、不思議なことに、地方に行くほど大都市のコーヒーが流行る。東京に近づけばいいと錯覚している人がいるらしい。

だから、もう一回、「農の風景」、さらに言えば、人間にとって本当の環境とか文化とは何だろう、というところへ関心をもってもらいたいわけですね。

身近な「水の文化」のあり様が変わってきている

赤坂 飲み水を買うなど、おそらく二十年前ではあんまり考えられなかったですね。今は、コーヒー入れるのや、料理にも使うのはもう珍しいことではなくなっています。が、まさに身近なものとしての水の文化的意味が変わってきている。しかも、非常に悪い方に。よく環境が変わったとか、風景が変わったというけれど、変わったのはわれわれの方。むしろ、私はもっと深刻なのは人間の暮らしとか、文化のあり様が大きく変わってきてしまったところにあると思いますね。わりと身近なものというのは、まさに湯水と同じで、関心が薄いですね。価値のなかつた飲み水を、お金を出して買うようになった。これ、すごい変化だと思えますね。

認識の仕方は時代によって変わりますが、例えば棚田というのが、いろいろなところで注目されている。でも、よく考えてみると、棚田が最近出てきたものかというところではない。たくさんあったわけですよ、ごく普通に。身近であればある程、その価値は分からない。しかし、危機的な状況になって初めて発見するのです。認識の布置の仕方に濃い薄いがあって、価値が転換し、今は水を買うようになった。湿地や沼の話



が出来ましたが、戦後すぐの頃だと思えますけど、盛んに農地を造っていた頃は、湿地や沼地はあつてはいけなかったわけです。一生懸命それを乾かして、農地に変わっていく。ついこの間までやってきたわけです。

ヨーロッパでも、中世の森林の心象は暗黒の森ですよ。幽霊やお化け、盗賊、悪魔が棲むような。ですから、早く全部切つて、広々とした農地や牧野に変えていきたいわけです。荒れ野はあつてはいけないうわけ、一生懸命耕地に変えていく。ところが、今は逆ですね。湿原や湿地を大事にしよう。ヨーロッパでは、そういうことを一九六十年代あたりでは、おじさん・おばさんたちがこれを守ろうと旗もつてやっていたわけです。いい年した大人が旗立ててやる(笑)。当時の日本なら奇人変人にしか見られなかった。そして、価値の大きな転換があつた。環境、景観が変わつたといえますけれど、人間の価値観自体が大きく転換していくことにも、かなり無関心なんです。

水の文化を風景から見る

進士 鳥と虫とか、ワシとタチヨウとかいいます。文化を語るには、高い視点から広角レンズで捉えることが第一です。事実、風景画はそうやって全体像を描いている。是非、風景の目は広いということを知ってもらいたい。日本の風景観の基調をなし、実際に最も大きいのは海です。水の遊びと文化というと、触れる水のイメージが強くて海が出てこない。われわれは子供の頃、毎夏、海水浴に連れて行かれた。福井には気比の松原という立派な砂浜と松原がある。その松原で海水浴をする。沖へ出て漁もやつただろう。それが、海岸に工場が立地し、日本の海岸線のほとんどが人工海岸化してしまつたわけです。しかし、いま海の風景に戻りつつあると思う。例えば日本海文化とか瀬戸内海景観に関して、燃えるような文化論が論じられ始めた。日本の旅の歴史を見れば海が出てくる。日本三景。安芸の厳島と奥州の松島、丹後の天の橋立は全て海の風景です。海の風景で最大なものが瀬戸内海です。

赤坂 私が関心を持っているのは鞆(たもと)ですね。鞆は朝鮮通信使の一行が瀬戸内海を通過するときには、必ず立ち寄るところでした。彼らは、江戸時代、將軍に朝鮮から大拳して表敬に来る。関門海峡を抜けて、瀬戸内海を来る。朝鮮の人達は文化水準が非常に高いし、いわばスター級の人が来るわけ、今度は誰が来るかというので日本の大名達も待っており、まさに船で行く所で、大敵

迎する。そして大阪に着いて、京都、江戸、日光あたりまで行くわけです。その中で、瀬戸内海を通るときには常宿にしていたのが頼なんですね。そこから見える景色は「日東第一形勝」と讃えた額が残っていますね。

瀬戸内海には、頼のほかにも転々と町並みのいい所がたくさん残っているのですが、近代以降、工業の発展と共にスタスタになりました。頼も、あそこに橋をかけようという動きがあり、反対運動が起こっていました。そういう水が運ぶ精神文化を支えていた所です。それと、長崎県の平戸にオランダの商館がありました。あの頃の商館のオランダ人も瀬戸内海を通って江戸に表敬訪問をするわけですが、朝鮮通信使の待遇を羨む記録を残していたそうです。

進士 日本の海岸風景を象徴する「白砂青松」というのも、朝鮮通信使が読んだ瀬戸内の風景です。広島に下蒲刈島しもかまがりというのがある、ここも通信使が滞在したところ。あって、ここも通信使が滞在したところ。

「安芸の刈蒲、ご馳走一番」と彼らが書いています。各大名家は、彼らを接待する御殿を造ってあった。彼らは、そこに一ヶ月以上滞在するので、もてなしが大変。でも面子があるので競うわけです。ガイドラインもあり、アワビは十個つんだのを出せとか、ゲストのランクによって、朝鮮通信使の大使クラスの人には毎回何品以上とかですね。その余慶というか、彼らはいろいろなことを教えてくれました。下蒲刈八景というのを詠んで、風景の味わい方を教えてくれた。私は新蒲刈八景をつくって、「ガーデ

ン・アイランド・下蒲刈構想」という地域計画を十数年前に策定したのですがね。ともあれ、水の風景文化というのは、ものすごく行動的だった。今のわれわれよりもずっとね。今は交通網がこれだけ発達して、どこにも行けるわけですが、その頃は船ですが、意外にダイナミックですよ。現代人には多分、心に余裕がないせいでしょう。目の前に風景が展開するけれど、それが心には映ってこない。旅をすればいい紀行文ができてもいいのに。当時の旅は、一生ものの貴重な体験だったでしょうね。だから、紀行文などもきっちり書き残した。

鷲羽山もそうだし、三原もそうだけど、どこへ行っても、瀬戸内海沿いは本当にいい見晴らし台があります。見下ろす風景がきちんと選ばれていて、そこから眺め絵画と詩に表現したのです。風景を味わうという仕掛けがあったし、旅人たちはそれに乗って味わっていた。今の人達は、それをやらない。理屈ばかりで、感性で素直に風景を味わうことがない。

赤坂 そうですね。移動の時も飛行機にしろ、新幹線にしろ、外部環境とできるだけ接しないような移動をしますから。なかなか触れあうなんてこともないし、浸って味わうというのは正反対ですね。

深く味わいたい

進士 『建築雑誌』（社団法人日本建築学会発行）の新年号で、百人の建築家に、二十世紀にあったもので、残したいものと捨

てたいもののアンケートを取ったページがあり、富田玲子さんが、「アルミサッシを捨てたい」とものとして挙げていた。私もそれはよく分かります。アルミサッシは完全密閉空間づくりを力発揮しているが、アルミはエイジングもきかない、時間が経っても古くなって味わい深くならない。鉄ならさびるし、銅も緑青がでて、味わいが出てくるけど、アルミは汚らしい白っぽいサビ、酸化アルミでよくない。機能的ですよ。軽くて、だけど、味わいとか、歴史性を感じさせるものが一切ない。私は、この方はなかなか感性豊かだと思いました。

山道 個人の感性もあると思いますが、住まい方や人生の時間の過ごし方など、もつと豊かなもの、いろいろなもの味わいたいという欲求もあるのだと思います。楽しく楽なことだけでなく、もつと怖い事、恐怖ですね、恐れや畏敬が反対側にあつて、双方を体験することによって、深い味わいになるということがある。そこで、川の中で遊ぶのは、水質的に安全にして、構造的に安全にしてではなく、思い思いをして、片



やそれに対して、もう少し工夫をするとか、技術を高める、それにより味わいが深くなるという仕掛けがほしい。川の中にはそういう条件が、いろいろな形で内包されている。そこに川の魅力があると思います。

進士 水の本質的な意味は、人間の生命の根源に関わるということですよ。だから、喜怒哀楽のように人間存在そのものなので、喜びと悦びのちがいが、心から悦ぶことができるのが、水の世界の本質なので、現代人はバーチャルな環境にとりこまれて、生の根源とは無縁になってしまっている。だから水を通して本当を体験したい。そう生きたいという運動になっていると思います。水がないと人間は生きていけない、という根源に戻る。近代が失ってしまったことをトータルに取り戻すということ。そこに、水の意味がある。そして海とか河川とか水のある空間に広がる。あるいは水を中介すれば、過去の文化の継承も、現在も、そこでものを考えることができる。

今、水の体験を味わえる場がなくなつて、原体験派と若い方の世代間交流に、かなりのギャップがあるのではないですか。

山道 場がないのではないのですよ。その場を味わうノウハウが二世代三世代、途切れてしまっているのではないかとということ。というのは、プール世代がノウハウ

を伝えなかった。場は工夫すればいろいろなところにあるわけですよ。日本中の川が全てコンクリートではないので、そこに行つて川で子供が何をするか調査すると、石を投げるしかない。入つていこうとしないようですよ。

進士 川原に入るのに靴に靴下で入っているんだって？

山道 そう。川に入りどう歩くか。流れの速さや深さを見て、対応の仕方や、歩き方など細かいニュアンスがあるわけ。それが今の子供達には分からないんですよ。

進士 私は子供の頃、越前平野のど真ん中の、日野川という大きな川の近くにいきました。夏になると毎日のように川に行きまして、砂利の上を歩く。泥やスキなどが生えていたりするから。安全を考えて石の上を素足で歩くんだけど、砂利は焼けるように熱い。夏の川原の石は焼けるように熱くてやけどしそうとか、田圃の中に入ったら粘土の、ヌルツとした土のぬくもりとか、ヒルが吸いついてね、これが結構気持ちいいような気分、でもヒルを取るの大変だけど。そういう感覚、これが五感ですよ。現代人は、例えばグラフィックデザイナーは、模様を書けばそれが視覚に反応すると思つているし、聴覚はB・G・Mを流せば満たされると思つている。そつではなく、本当の五感をもっと深いものです。それが

今、五感を感じさせるようにデザインしてない。全部分析的で、メカニカルで、専門家の浅知恵の結果です。本当の自然に戻ればいい。そこには全てが揃っているのだから、そこから入つていけばいいということですよ。プール世代は、泳ぐ機能を分けられてしまつたわけでしょう。ノウハウとはいうけれど、人間も生き物だからその場に置けば、一週間ぐらいで動が戻ると思う安心感はある。だから、そういう所に、子ども子供たちを放り込めばいい。全身で五感を含めて、五体をフル稼働して地域地域の場所を生かすような体験でプログラムを作つていけばよいでしょう。

赤坂 五体ということ・・・？

山道 五体で何をやるかと言つと、今、リーダー養成のために、多摩川源流で仲間が沢登りのコースをつくっています。これにはリーダーがきちんといるのですが、手足とありとあらゆる機能を使って、数百メートルの沢を登らせるのです。それはもう、自分の持つ持っている機能や知恵を使ってやらないと、滑つたり怪我したりするので、サポーターがきちんと指導しながらですが・・・。

進士 今の子供達には迷惑なことだけど、親や先生達が安全にし過ぎてしまった。安全、効率ばかりが言われます。めずらしいことに、文部科学省と国土交通省が一緒に

都市の公園を環境体験の場所に造りかえようということ、そのマニュアルづくりの研究を開き、間もなくこの成果は本になる予定です。その研究会は、私が座長をしたのですが、行政と市民側の論議の相違点は安全と体験の兼ねあいですね。水のことを考える上でも、アメニティとセキュリティというテーマは普遍的なものなのです。

山道 短期的に見ればマニュアル作つておいた方が安心かもしれないけど、長期的に見ればね、そこでノウハウを獲得することが永い人生の中では、安全というかね。プールで泳げても海で泳げないという人は結構いますからね。アメニティとセキュリティをどうつなげるかが課題ですね。



教育と体験のあいだにあるものを伝えるその背景にあるメッセージを感じました。その熱い思いの出発点は、三者三様、子供の頃に味わつた、さまざまな水との原体験にあるのでしよう。

子供の頃の思い出を語るみなさんの楽しい語り口が印象的でした。

interview

関わりを育んだホタル調査

くらしの眼から環境を見る。これを「生活環境主義」と名付け、琵琶湖をフィールドに実践活動をなさってきた嘉田由紀子さんと小坂育子さんを琵琶湖博物館に訪ねました。いわゆる環境学習とは違う目線と活動を、感じ取っていただきたいと思います。



小坂育子氏

水と文化研究会 事務局

1947年生まれ。志賀町立図書館（司書）勤務。滋賀植物同好会会員として、滋賀県の植物調査にも参加。地域ではまちおこしの会や更正保護活動に参加し、私たちが暮らす身近な水環境を支点にして子供の環境・暮らしの環境を見つめていきたいと活動を進めている。

共著に水と文化研究会編『みんなでホタルダス - 琵琶湖地域のホタルと身近な水環境調査』新曜社 2000年がある。



嘉田由紀子氏

滋賀県立 琵琶湖博物館 研究顧問
京都精華大学教授

1950年生まれ。京都大学大学院、米ウイスコンシン大学大学院修了、農学博士。滋賀県琵琶湖研究所主任研究員、滋賀県立琵琶湖博物館総括学芸員を経て、京都精華大学教授。環境と人間の関わりと比較文化論、特に日本・アメリカ・アフリカの三文化比較、住民参加による環境保全の理論と実践、地域研究・交流拠点としての博物館、が研究テーマ。

著書に『生活世界の環境学』農山漁村文化協会 1995年、『水辺遊びの生態学』農山漁村文化協会 2000年、他多数。

水の文化からホタルを見る

まず、嘉田さんの考える「水の文化」について教えていただけますか？

嘉田 私たちの活動の対象であるホタルを例にとってみても、語れると思います。

認識という側面から見れば「ホタルはきれいな」という、一般に定着した共通認識で終わってしまいます。一歩進めて、「でもホタルはどういう所に棲んでいて、そもそも日本人は何でホタル好きなんだろう」と考えを深めていけば、ホタルと日本人との関係性につながり、価値観にまで行き着きます。

水の文化とは、水と人の関わりに潜む認識と関係性の問題であり、そこに潜む価値観の問題。これらがトータルに凝縮されたものだと思います。

小坂 私たちは平成十一年（1999年）デンマークの『湖沼会議』でホタルの発表をしました。その時ホタルについて聴衆はほとんど気にしてくれず「何でホタルなの？」と言われました。ヨーロッパではホタルを気にしません。アメリカでも同様でまったくの無関心。アメリカに行った時に「ホタルは？」と聞いたら、「猫が追いかけているよ」と言われたくらいで、彼らにとっては興味の対象ではないのです。だから、日本人がホタルにこだわるのは、日本人の価値形成と深く関わっていることだと思います。その代わり、アメリカではホタルではなく鳥なのです。湖の周辺で共同調査をしよ

うという時に挙げられる鳥、たとえば「ルーン (loon)」という「キキキキ」と、「すごい鳴き方をする鳥」「crazy like loon」、つまり「ルーンのようにうるさい」という言い回しに、日常の生活の中で使われています。ただ、その鳥は姿を見せません。けれど音は聞こえる。音で、いるかいないかが分かる。だから住民参加の調査にはいいわけです。

また、自然度の高い湖でないルーンは、いけません。今、ルーンは開発の波に乗ってカナダの方に追いやられ、絶滅危惧種に近いのです。いろいろな条件から、アメリカではルーンという鳥は文化化された鳥として認識されています。

嘉田 そうですね。それに比べて、日本では鳥にはあまり興味がありません。それよりもむしろ日本人の興味の対象は虫なのです。虫好きという点では、日本は世界に冠たる国で、肝心の母国フランスではほとんど読まれていない『ファーブル昆虫記』が、世界で一番読まれているということからも、日本人の虫好きがわかります。つまり虫と人の関わりに、日本では大変特殊な価値観をおいているのです。これは中国からの影響もありますが、それがだんだんに日本化し、「鈴虫」や「ホタル」といった生き物が文化化されてきたわけです。

小坂 先日、「ホタル関連文献目録」を水と文化研究会のメンバーの遊藤正秀さんが作ることに、ホタルという名前の付く小説や団体などを調べたら、ものすごい数

があつて、我々もびっくりしたんです。

嘉田 三千だったかな。ホタル一種とってみても、これだけの蓄積があります。

小坂 いろんなものにホタルのタイトルがついている。「ホタル川」とか「ホタルの光」とか。いわばホタルは文化昆虫で、それだけ生活に入り込んでいるということですね。

嘉田 どうも日本人がホタルに求める価値観というのは独特で、和泉式部の詠んだ歌にも典型的に表れています。「物思えば沢のホタルもわが身より あくがれいずる たまかとぞみる」これは和泉式部が貴船神社にお参りした時に詠んだ歌です。ホタルにわが魂を乗り移らせる、つまり、自分がホタルになったという、これは日本特有の、

人間と動物の間を行ったり来たりする感覚です。これは欧米にはありません。

また、水の谷川には、はかない、一瞬のきらめきのような輝きがある。日本は谷川文化ですからね。国土の七割が山でしょう。そういう点から考えると、風土的・歴史的にホタル一つが持っている価値というのが、精神文化にまで深くつながっているのではないかと思います。

同じ事が、ホタルではなく水についても言えるということですね。

嘉田 その通りですね。水というのは何もかも含むるものです。形はどうにでもなる、丸くもなれば平らにもなり、いわば人の望みに沿うような形で入り込みます。物に沿う力と流れを持ちながら、一旦荒れ狂ったら手におえないという、両義的な存在

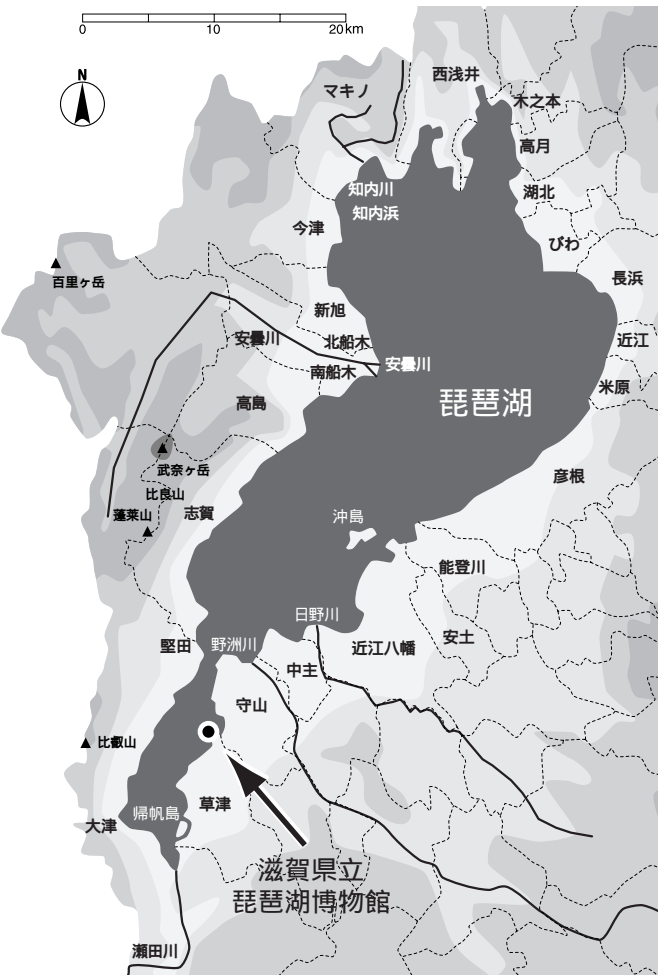
です。清濁併せのみながらも、やはり太陽の光で蒸発していく時には、ピュアな水の分子になっていきますよね。この辺も面白いですね。

それから、日本の思想というのは、目の前で米を作るために水が必要だと思いがちですが、水を単なる物質としては見ていないわけですね。水の中には神様がいて、生き物もいるし、水そのものが持っている風景としての価値とか、いろいろな意味を見いだしている。そういう事を考えると、日本を理解するキーワードは、やはり水ですね。

食べ物からみてもわかります。たとえば中国では生水を飲みませんよね。それに、水の味が悪いと都合が悪い中国料理があるかと考えてみると、あまりない。味付けも濃い。でも、日本の料理では豆腐も、酢も、お酒も、日本食の薄味で素材の味を生かすためには、水の匂いが非常に問題になります。

関西地方の現状を言えば、京都で琵琶湖の水の臭いになぜこれだけ敏感になるのかと、皆さん思われるでしょう。夏場になってプラントンが発生して、真っ先に苦情が出るのが蕎麦屋さんからです。素麺やお蕎麦にプラントンの匂いが付いてしまふことを嫌うのです。さらにお豆腐屋さんなど、水を大事にする産業があります。お米そのものも、同じです。

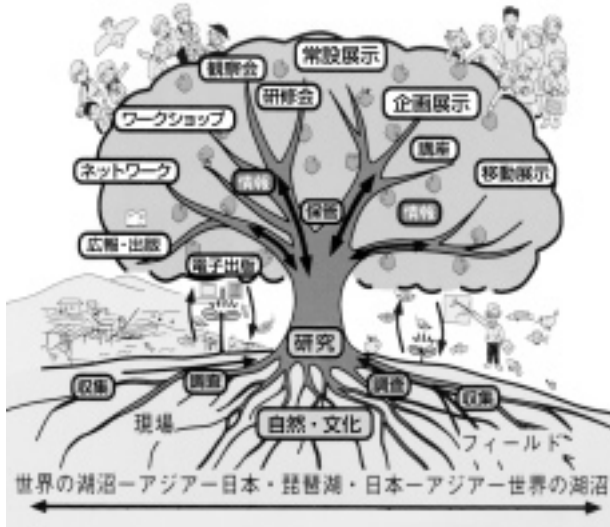
それに対してヨーロッパは火の文化なんです。台所の中心が火なのです。一方、日本は台所の中心が水でしょう。関西でミズヤと言ったら、台所のことを指します。流しがなくても洗い場を取り込んでいたら、そこが洗い場で台所です。昔の家は、流し





琵琶湖博物館前景

博物館はたとえてみると、大きな樹木。良い実を实らせるためには、豊かな研究や資料が必要。ー琵琶湖博物館の活動イメージを表した図『滋賀県立琵琶湖博物館案内』より



がなくても川が流れていればそこが台所だったのです。実際に琵琶湖博物館の中に展示されている「富江家」がそうなっています。子供達が来て「この家のどこが台所？」と聞くから、「ここよ、この川の所が台所」と言っただけで、ミズヤ＝水屋＝台所なんです。水がなければ台所は成立ちません。もちろん火も大事にしますが、日本の場合は比重として、いかに水に重きが置かれているかが分かります。

水は、社会の関係を

映し出している

嘉田 東南アジアも日本も、その『水』が生産組織とつながっています。だから、社会の関係を水の中に表現するのです。

日本の地域社会の特色は何かというと、まず地理的な境界がしっかりしていること。境界争いはなぜ起こるかというところ、山の幸や水を、自分たち村落の境界内で自主管理したいという、一種の資源の囲い込み意識からです。以前、「地域環境アトラス」というデータベースをつくりました。大字の境界と水系の境界を重ねてみたことがあります。見事です。水系の境界が字の集落境界とびたつと重なりました。

日本の村についてみると、たとえば湖に川が注いでいる。その川に山から水が流れ込んでくる。その場合、山のとっぺんまでを自分たちの領域にするんです。これを平面で見ると、川が水を集めてくる集水域イコール地域境界になります。

「ここから向こうは隣村。こちらはうちの

村。だから境界争いをしない」という暗黙の了解が双方でできてくるんです。もちろん、多少の例外はありますが。

この地理的な重なりと、水を集めてくる領域と、自分達の社会組織としてこの水を管理する領域が自律的に出来てくるわけで、溜池などは中間的な溜め場になる。これらどのように組織として管理していくかですが、水番とが、井頭とか水世話とかいった人達が、村の中の水を公に管理する役を受け持っている。水は村のもので、村の水世話とか水番が公に公平に皆に分ける。その人しか、水の入り口は触れないんです。

この場合の組織について教えてください。

嘉田 村落共同体という言い方をしますが、例えば、ここ琵琶湖博物館の地番は、草津市下物町で、一九五五年（昭和三十年）の以前は常盤村でした。明治二十二年までは下物村だった。これが、この地の村落共同体としての基礎的地域社会です。

たとえば、村が六十町歩の田圃を六十軒で耕作しているとします。税金を支払う義務者は、年貢村請制といい、村になります。どこかの家の収穫が悪くて年貢を納められないとなれば、村の他の人が村全体として補充しなくてはならない。これは、上位の支配者にとってみれば楽です。個人に税金を集めなくていいのですから。つまり、村は徴税機関でもあるわけです。ただし、今年はずばつだからといって、減免要求を

出すにしても、それは個々の農家が出すのではなく、村として出すわけですね。また税金を取る組織であると同時に、裁判もできる法人格も持っているのです。村には、会計、水番、堤防番などの代表者がいました。漁業の村ですと漁業関係。また、氏子総代などの神社関係、寺院関係など、一種の機能的アソシエーション集団をコミュニティ全体が抱えていたわけです。

コミュニティというのがポイントですね

嘉田 それぞれの機能を抱え込んだ村がコミュニティになるのです。だから、水番というのは、水利組織のアソシエーションになるわけです。これは村の下部組織になります。ただし、水番も、たとえば一つの川を隣近所の四つの村と一緒にいったら、これは水利組合の連合組織ができてきます。漁業でも場合によってはいくつかの連合組織ができる。けれども、いつも基礎社会は村なんです。

当時の下物村は、裁判もできて、土地も所有できました。それが、周辺の村と合併され、常盤村ならば常盤村が行政体になり、字は制度外の存在になってしまつたのです。裁判もできなくなり、管理する権限もなくなつていきます。そして、単なる大字という地名を担う存在に、地方制度の上ではさせられます。でも、村に住んでいる人にとっては、洪水はあるし、水の問題、漁業の問題、山の問題など、今まではみんな共有でやってきたことを、違う組織に押し上げられたら困るわけです。



子供が楽しむ「情報利用室」(上)と「図書室」



魚でもそうです。ここに、水と魚と森これをいかに共有の形態に残していくという所で、明治政府と入会紛争が出てくる。慣行水利権も、水の権利を行政から許可されるのではなく、自分達が慣行的に持っていた権利として、いわば生活権として認めてほしいということで、村を中心に水利組合ができてくるわけです。漁業権も、生活権として漁業組合ができてくるのです。

漁業権を付与する組織もたくみで、明治二十年代、三十年代と漁業権紛争がたくさんあり、政府は全部公として国有化にしかつたんです。太政官布告で、近代官僚制に則って、漁業は国が権利を持って、それを一つ一つ許可するという許可漁業権のような形にね。しかし、抵抗が大きくてそれはかないませんでした。そこで、考えられたのが、明治の漁業法を作るときにローマ法でいう「個人的な私有関係」を残しながら、そこに「実在的総合人」という「法人ではなくとも、実在として存在している組織には権利を与えましょう」という実在的総合人という概念を作り出し、その実在的総合人に漁業権を与えたのです。この漁業権は財産権なんです。その結果、きわめてたくみに、今までと同じように、村の側で権利を持ち続けることができたわけです。ただし、名前は違って、漁業組合になったり水利組合、あるいは森林なら森林組合とか名前は変わるんですけど、実態は村なんです。

このよつな村落のあり方というのは、日本独特ですか。

嘉田 東南アジアなどでも、焼き畑のような生産様式は、いわゆる共有の形態、日本でいう入会を保っています。ただ日本は制度としてかなりきっちりしています。

実在的総合人による所有形態を「総有」といいますが、例えば土地を所有する時に土地台帳があり、ここで個人の所有権は、国家の認定と直接対応するわけです。ところがこの総有は、個人と国家の間に実在的総合人という組織があり、国家は組織に権利を与えるのです。組織の成員権イコール所有権であったり、利用権であるわけです。例えばある村が百ヘクタールの山を持っています、その村に住み続け、村の成員である限り、百ヘクタールの一部分を使用することができず。逆に、たとえば都会に移動するからと、日常的にその山を使用しない場合に、「私に百ヘクタールの百分の一を持ち出させてくれ」と言ってもダメなんです。これが持分共有と総有の違いです。近代法でいう持分共有なら、現在のマンションでも百分の一の権利があると、その権利で取引ができますでしょう。それは個人所有の上に乗っている共有なのです。それに対して総有というのは、集団所有の上に乗っている。つまりそこに住むことによって燃料が必要だ、わらびも必要、家を造るのに木も必要、そういう居住して利用することが許される、生活の必要を賄うための財であるわけです。

だから、商品化を前提にしていない。大事なのは使用価値なのです。使用価値の上にあるのが総有の大事な所。ただし魚の場合には、商品化することは可能です。魚の

場合は総有の組織が漁業組合になるわけですね。漁業組合に入っていることによって、たとえば川口の築の魚を捕る仲間に入り、仲間の分け前をえることができます。でも組織に属していることが必要なんです。魚は移動するのでたいへん難しいです。ただ日本の漁業権のように地域社会と密着した漁業権は世界で見ても珍しいんですよ。外国では魚はフリーアクセスが多いのです。集団に帰属することで、その成員であることにより共有資源へのアクセスが可能となるケースは、アジア・アフリカ地域には意外と多いのです。

そうですね。なかなか権利確定は難しいですよ。

嘉田 それで、先程言った境界なのです。陸地の境界がありますでしょう。その境界を海に伸ばして、この延ばした先、これはどこまでも、ではないんですよ。地付権とありますが、例えば湖の上で事故があった時に、その場所を新聞記事に載せる時は、下物町「地先」という表現をします。地先が地付権、つまり水の上にもきちんと境界があるのです。

琵琶湖の場合は境界を伸ばしていくとどこかで交わりますが、海の場合はどうですか？

嘉田 海の場合も原理的には同じです。地付権というのがありますが。ただし、無限ではなくてこれは慣習で決まっています、



琵琶湖の生き立ちを展示。展示室入口には化石がはめ込まれており、自由に触ることができる。(右)
古琵琶湖層から発掘した化石コレクションも展示されている。(上)
博物館の建設時に行ったボーリング調査を、そのまま再現。湖の地層がよくわかる。(左)



たとえば、水底が見える範囲までが地先であるという習慣がある所もあれば、竹の竿が立つまでという所もあります。昔の竹竿は、せいぜいが五、六メートル位ですから、水底が見えるというのは、生態的な意味があるんです。太陽の光が届く所ですよ。そうすると、地付きの資源、つまり魚以上に大事なアワビやサザエがある所、これがどこの村のものか、明確に決まっていけません。その沖合いまで、とは言いません。これはそれぞれ地域の伝統であって、極めて個別の地域性の色合いが強くなります。

琵琶湖で例を挙げますと、沖合いは堅田が管理していました。これは不思議ですけど、足利尊氏が与えた権利ということで、堅田湖族（海賊ではなく）が琵琶湖中を回り、「おまえの所のえりは長いぞ」「網漁業をしてはいけないぞ」と警察のように秩序形成をしていたわけです。そういう湖上特権を持っていたのです。堅田は、中世の比叡山と一緒に、寺内町のような形の独立自治都市として存在しました。堺と堅田が有名です。

中世から江戸初期にかけて、日本海から船が通りますね。京へあがる荷物のために、大体琵琶湖で三千艘の輸送船（丸子船）があったといえますから、堅田の沖で税金を取っていたのです。ですから、足利尊氏にしろ織田信長、豊臣秀吉にしろ湖上を動く時に、堅田とか沖島とかの人を船を動かすため労働者として使っていたので、権利の後盾をした。今でも沖ノ島には、織田信長が権利を与えるという書状がありますよ。北船木のお宮さんには、源頼朝の繪旨が

あります。私も、見せてもらいました。歴史学者の網野善彦さんは疑文書だと言っていました。疑文書でも社会的には意味があるわけです。ちゃんとそれによって、いまだに北船木の特権的漁業権は機能しているからです。北船木には安曇川があり、たくさん魚が捕れました。春にはアユ、夏はバス、秋にはマス。三種の魚が湖から川が上がって来ます。

琵琶湖の魚は五十数種類いますが、産卵時には、みんな人間側に近づいてきます。これが琵琶湖での生態系の特色で、田圃に入ってくるものもあれば川に入ってくるものもある。その川に入った所で築を仕掛ける、一網打尽なんです。とても有利な漁場です。川の出口の漁場をどこが取るかというのが大事で、安曇川でいうと北には北船木があり、南には南船木があります。川から見たら地理的には同じ距離です。それなのに安曇川の魚を南船木の人は一匹も捕ることができない。

なぜですか？
嘉田 頼朝ですよ。(笑)今でも生きてるんですよ、ちゃんと。
すごいなあ。

嘉田 すこい所です、近江という所は。漁業権というのはそれぐらい奥が深いのです。今でも北船木は二百戸ほどありますが、二百戸全てが漁業組合の組合員なのです。村の成員イコールほとんど漁業組合員です。

ですから北船木で漁業をする権利は、村の中で漁業組合の組合員にならないといけないわけで、組合員になるには村入りする必要がある。組織の成員になることによって権利がある。これは個人所有でない。これが先程から言っている総有です。

水とか山とか、いろいろな所で問題になっている環境系のマージナルな部分、「私的所有」から離れていく部分は共有的に管理をしている所が多く、これは単に利益を得るだけではなく、義務もきちんとして行っているわけです。山だったら下草を刈らなくては行けない。川を使う人達は、水害も自主管理をしていたので、『水と人の環境史』(注1)という本にも書いてありますが、雨が降ると村の役員、堤防委員、区長さん達は夜中見回りです。今でもやっていますよ。堤防がどこかで危ないという、今だったら夜中でも、電話で呼び集めて十六歳から六十歳くらいまでの人を呼び集めて、シヤベル持つてこい、です。そして土嚢を積んで、一時的な応急処理をします。昔はそれだけではなく、後々の補修まで全て村が行っていました。要するに自分達の川なんですよ。

私（プライベート）と 公（パブリック）の間の 共有（コミュナル）

それは漁場でも同じですか？

嘉田 同じです。たとえば、魚場の場合は湖岸を歩くと松林がありますでしょう。誰が植えたんだろうと調べてみると、多くの



「琵琶湖の自然史研究室」(左) 地質 + 化石だけでなく、それを研究するプロセスを展示している。上は「魚類化石研究」コーナー。

場所は漁師が植えたんです。魚付き林です。特に川の入り口、例えば知内川では、両側が松林です。ここは延享年間から現在まで村が日記を付けているんですが、最初に村の日記をつけた庄屋さんには、「後世に村の出来事を知らせたい」とちゃんと書いてあるんですよ。今でもずっと書き続けていますよ。つまり、村が自分達の地域を管理しなくてはいけないという主体性を持っているんです。そういう、村の日記をひとつずつ見ていくと、明治四十何年かに「湖岸に松を植える。魚付き林のために」という記述がある。これを発見しまして、「ああ、あった、これや」という話で。触れているんですよ。ちゃんと。ですから、今、漁師が山に木を植える活動をしておりませんが、明治から、というか江戸時代からやってきました。木を植えることで木の葉が落ち栄養分になるし、木陰になります。魚は木陰が好きですから。川の入り口に作れば魚がしっかりとよってきて、それで川で産卵すれば、築にもたくさん入ります。だから、それは自然に放置したのではなく、自分達の漁業活動に都合のいいように手を加えた人為的な自然なんです。わたしたちの研究仲間が、これらの日記を全部活字にしています。

知内村には義務人夫と有償人夫があり、義務人夫は年に四日間出ないといけません。まず春先の水路掃除と、それと夏の草が生えた時の床堀(とこぼり)という水路の掃除。それから八月上旬のお墓の草刈などをすることになっています。これは、全戸が出なくてはなりません。そうやって、自分の川や道の自主管理をしているのです。

役場に頼むのではないのです。自分たちでやるんです。

それから、これは今はやっていませんが、境参りさかまいといって、山の境界が分かるように、境界の木を切る作業もありました。地域によっていろんな呼び名がありますが。

このように、集落のいわば生活空間を共同的に守るための義務的な仕事がたくさんあり、それが結果としてその資源を利用してもらうという権利とセットだったわけです。こういうことは、こちらが知っていて聞かないと、けっして出てこないんですよ。ほとんどの近江の村は、村としてまだちゃんとしていますから。

今おっしゃった部分は、プライベートコミュニティ パブリックの、コミュニティの部分ですね。その時々によって、三者の関係は変わってきましたけれども、コミュニティの部分には存在し続けてきたわけですね。

嘉田 私は「コムンス」ではなくて、「コミュニティ」と言っています。「コムンス」という翻訳は誤解が多いのです。江戸時代にはコミュニティが圧倒的に強いですね。それが明治政府ができてから、だんだんに森林を官有地化していくわけです。東日本では比較的官有地の比率が高い。これにはいろいろ要因があるんですけど、地主 小作関係が厳しく、村の中がより階層的で、私有制度がきつかったというような解釈もされています。それに対して西日本では、個々の家が平等で、家連合としての村落が比較的同質的だった。だからピラミッドじゃなくて、家同士の横のつながりが強くなったのでしょうか。

ネットワーク型ですね。

嘉田 ネットワークと集団はまた違うのですが、ネットワークというのは境界がないのです。それに対して、村は極めて境界はつきりしています。内と外がはつきりしているから集団であって、ネットワークではないのです。集団的な自主管理組織としての村が、大字になり、自治会になりして、だんだん公権力が入ってきます。

山を官有地化する、川を一級河川化する、道路も村が管理していたのを町道や県道にする。これは国の側が官有財産に組み込もうと一方的にただけではなく、村落の方でも「川の管理が大変だから、一級河川にしてほしい」と陳情したり、道を村道から行政の方で管理してほしいと陳情をしていくわけです。自分達では管理しきれなくなると、川はだんだん遠くなって、国のものになっていく。今まで川の水を引くことは、内部の水利組合でできました。魚の部分だけは、今でもずっと漁業組合の管理のもとなんです。水については違いますが、いわば水を手に入れた官僚支配の元に入れていくという動きが、昭和二十年代、三十年代頃からありました。それを法律的に総仕上げしたのが、昭和三十九年(一九六四年)の河川法改正です。明治二十九年に河川法があるんですが、その時には慣行水利権を残していたものを、昭和三十九年には、



昔の人の生活を展示。
右は粟津貝塚の上に縄文人の生活イメージを再現したもの。
江戸時代まで、湖上輸送の主役だった丸子船(上)
足踏み水車(左)

もう農業水利の八〜九割は許可水利権になりました。その時から、地域を流れていた水がなくなっていくわけです。

どういふことかというところ、許可水利権になると、たとえば建設省が農林省に許可水利権を出す時に、「米を作るためだから、四月から九月だけ水があればいいじゃないか、十月から三月は水はいらない」という理屈はそうですね、農業用水が単一機能になっていくわけです。ところが現場を見ると、農業用水の水は地域を流れて、生活用水になり洗い場になり、子供がいて、魚がいて、ホタルがいて、多機能な地域用水だったわけです。そういう言葉はありませんでしたけれど、それが、許可水利権になった途端、単一機能化した。そうすると冬水がなくなるのです。ホタルは水田周辺の水路や集落内に多かったのです。

そういうことが背景にあるのですね。

嘉田 明治以降の、水資源が国家管理化の中に入っていく過程で、起こってきた問題が琵琶湖逆水です。農家の人達も土地改良をしたら、ダムもできるし水は存分に入ってくると思っていました。これが他の全国の土地改良区と違う所です。

琵琶湖周辺の田圃は、干ばつにもすくなく悩んでいるんです。山からきた水が、目の前にあるのに使えない。だから一旦下がってしまった琵琶湖の水を使うという、大変な苦労をしています。足で踏む、足踏み用水はご存じですか。あれね、一人が一日やって一反歩がようやくです。大変な労働

力です。それで大正時代になってパーチカルポンプが入ってきて、重油で逆水する、それでもクレークまでは水は溜めておかななくてはならないでしょう、ですから、昭和初期でも琵琶湖から水を引いて欲しいという陳情がいっぱい出てくる。それが、琵琶湖総合開発で可能になったわけです。一番遠い所にあるのは、日野町で、延々と琵琶湖の水を三十キロも揚げています。それまで琵琶湖周辺で五万ヘクタールあった田圃で、昭和三十年代ですと、琵琶湖の水を使っていたのは、せいぜい数千ヘクタールもいかなかった、本当に湖岸ぎりぎりの所だけですよ。

川にダムができることで建設省の水利権管理が進んだ。「嘉田さんな、わしらこんなに冬水がなくなるとは思わなかった」と村の人は、水利権をもらう時に冬に水がなくなると嘆くのです。工事するまでは、分からなかったことです。そのことに想像力がいかなかったというわけです。いいことばかり見えてね。「ああ、これで水の苦労をしなくていい。だから、ダムは作ってほしい。土地改良してほしい」と、いいことばかり見えて、冬水がなくなるなんて誰が想像していたか。でも、いざ工事やって、「あれ、冬水ないやないか」それで、農家の人が土地改良区に言いにいくと、「水代、お金を払え。今まで無意識で使っていた地域用水が取り上げられてしまったのは、地域の方にもまったく原因がないわけではなくて、そこまでの想像力がなかったのです。

生活環境主義

嘉田さんが、琵琶湖博物館の創立企画段階から一番の目的に置かれたことは、今おっしゃったような世界を楽しく体験的に子供たちに伝えるには、どうしたらいいのかということだと思つたのですが、「水がきれいなこと」だけなら比較的簡単に伝えられますが、暮らし、歴史、目に見えない所有関係、その背景にある社会関係をどのように伝えるかについては苦労があったと思うのですが、いかがですか。滋賀県とのつながりはいつ頃からですか？

嘉田 そうなんです。私が、初めて滋賀県の調査に来たのは、昭和四十九年（一九七四年）。アメリカに留学した時、修士論文のテーマにアフリカを選ぼうとしていたら、アドバイザーに「ユキコ、おまえは日本人なんだから、ちゃんと日本のことをやれ」と言われたのがきっかけです。

それで七四年の夏休みに日本に帰って来て、農村社会の、特に技術革新がどう浸透していくか、それを受け入れる人の意識の変化、どういう条件で新しい技術を導入するのか、当時だったら田植機やトラクターをどうするかなどについて研究しようと思いました。そこで、母校の先生に相談したら、「それはやはり近畿圏で、農村をちゃんとやるなら滋賀県だ」と言われました。紹介してもらって歩き始めたのが最初。

琵琶湖研究所が、昭和五十六年（一九八一年）に社会学、人類学の人も一人募集するというので、応募しました。そこが出発

点です。

そこで「湖岸の人と湖の関わりを、社会学あるいは人類学でプロジェクトを立てて、考えてほしい」と任されたのです。誰も先人がいないのです。そこで湖岸を歩きながら出会ったのがマキノ町の知内という村。二百五十年の記録があるんですよ。これは、ちゃんとひといて研究するのにいいということ、知内村にびっちり通い始めました。それも一人では無理です、リーダーにお願ひしたのが、鳥越皓之さん（筑波大学教授）でした。その他人類学、社会学、地理学の人達に呼びかけて共同研究が始まりました。村に入ってマキノ町の知内という調査をしていくと、村の組織が大変しつかりして歴史もある。あそこは昭和三十二年までは川の水を飲み水に使っていたんです。

知内村というのは、百戸ほどの家があります。知内川の南には前川が流れている。三すづつぐらいで小さな「組」というに分かれています。この上の組、^{あづまの組}上知内でも三十二戸かな。ここでは知内川の水を昭和三十二年まで飲んでいました。なぜ簡易水道になったかという、農業を使い始めていけずの魚が死ぬとか、テイラーという農業機械を導入したせいで、泥が川に入ってしまうので、自分で簡易水道を造りだすんです。

かなり苦労して水道をつくったのですけれど、昭和五十七年（一九八二年）の夏、私たちが村の中で調査していて、近くの子供にね、「あんた、この川、あんたのお父さんやお母さん、子供時代飲んでたんだよ」

と言つと、「うそおー。知らないー」つて。

「家で聞いたことなかった？」「そんな話聞いたことない」「確かめてみよう」と言うたら、「二、三人女の子がいたんですけど、次の日にね「おばちゃん、やっぱり飲んでた」と。当時、前川はかなり排水路化してまして、各家から排水用の塩ビパイプを出して、かなり汚かったんですよ。でも、ほんの二十年前まで飲み水にしていたその川の歴史が語られていない。家の中でも、地域の中でも、これは大変なことだ、と思いました。

なぜ、前川が飲み水でいけたかという、まず絶対に排水は川に流さない。それに朝早い内に水を汲む。洗濯は日が高くなつてから。しかも下のものは、川では絶対に洗つてはいけない。おむつなんかはタライで洗つて、それをお便所に入れて、お便所に入れたものを畑に持っていく。とにかく、排水を出さない。子供には「川でおしっこをしたら、おちんちんが腫れる。絶対、おしっこしたらあかん」で、万一おしっこしてしまつたら、お清めの塩を流して、「水神さん、ごめんなさい」って謝らせる。毎月一日には清めの塩を流す。それから十二月三十一日の年末には、水の恩を贈る。

つまり、川が生きて、生活に使われていて、そういう伝統があるわけです。その伝統のことも、もちろん語られていません。飲み水にしていたことが語られていないのだから、伝統なんか語られる訳がない。私達が聞きに行くと、いっぱい話をしてくれるわけです。「こんな話なあ、家の若い者は聞いてくれへん」（笑）。

語られないと、だんだんと川に排水を流すようになってしまいますね。

嘉田 そうです。なぜ、語らないかという、一つは恥ずかしい時代だった、貧しくて、川の水なんか飲んで、下等だと思つていた。だって、水道化というのは文明化、都市化の象徴です。

小坂 わかるよ、わかる。「川の水なんか飲んで、恥ずかしいわ」という感覚、やっぱり言いたくない。

嘉田 言いたくないよね。

小坂 誰かが言い出したら「実は、私もやん」と言えるけど、口火を切つてはやっぱり言わない。

嘉田 言いたくない。昔からかつこよく水道使つていた、昔から電気ついていたよ。貧しかったと思つているし、社会全体が農村は貧しい、電化しなきゃ、水道化しなきゃと言つて、都会中心のそういう情報が一方的に、都市が上で農村が下つて入ってくるでしょう。

小坂さんもそういう農村で育っているし、私もそういう農村で育っているから、「井戸水なんか恥ずかしい」「水道は上等な水」そういう気持ちがあるから、語れない。語らなかつたら伝わっていかない。

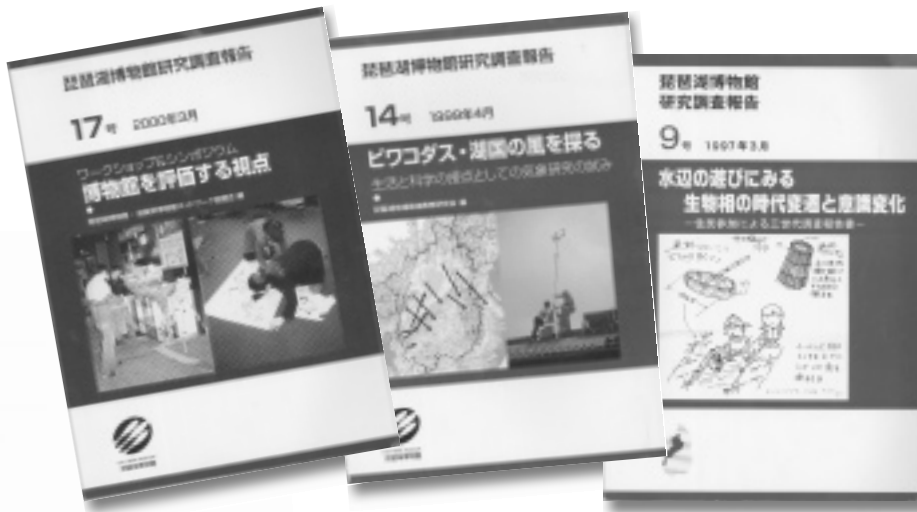
それで、これは発掘しなきゃということ、『水と人の環境史』の本も、昭和五十七年（一九八二年）〜五十八年（一九八三

年）に調査をし、ともかく本にしようとしたのが昭和五十九年（一九八四年）。当時ずつと行政の動きを見ていましたが、どうも琵琶湖の環境問題に関しては二つの見方しかなかった。

一つは、総合開発が始まっていますから、水が汚い、汚れた、だから下水道を造ろうという近代技術主義。地元の人は、たとえば、下水道を造つて全てがよくなると思わない。「この田圃見てみるよ。圃場整備して、水をだんだん流して、これでええんかいな。県はええんかいな」県がやることにもちゃんと疑問をもっているわけです。

それに対して、開発反対、生態系を守る、生き物のいのちが大事だという自然保護論。こつこつ自然保護派の人達に対して、「自然、自然で言うけどな、あの葦原（よしはら）なんていうのは自然じゃないで。わしらが毎年刈つて、利用して葦が生えるんじや」「自分達が使つて利用して管理している自然を、都会の人は知らんと、まったく自然だと思つている。あれおかしい。」だから、自然保護派に対しても違つと思つている。行政とか技術者の言うことも違つと思つている。やっぱり、地元の人が生活者として見えている視点、これを残りのものカテゴリーではなく、第三の道としてちゃんと旗を立てようじゃないか。というのが、生活環境主義なんです。

近代技術主義で自然は管理する、水なんかきれいにできるんだという典型が、琵琶湖総合開発の時の、矢橋の帰帆島。下水道を造つて、排水が出て、湖を汚すと反対派



研究報告書とパンフレット。製作物は、常に“参加”を意識してつくられる。

「くらしの中の水を調べるコーナー」左から洗面、流し、トイレ、それぞれの渦巻きには、そこに流されてしまうものをリアルに並べてある。



同じ量の牛乳を、紙バックで運ぶとトラック1台、ビンで運ぶとトラック52台。環境にはどちらが良いのでしょうか。



の人が言った。その時に、京大の衛生工学の先生が、処理場の水を飲んだという有名な話があります。「私たちの技術を信じてください。下水道処理技術で、どんな水でも飲めるようにできる」衛生工学の人の技術信仰は大変強いのです。

それに対して、「そんなのオカしい。やっぱり生き物なんだ」といって生き物を見ている人は、「こんなにすこい生態がある。生物や生態系を守ることが環境保全だ」という。これが生物主義なんです。そういう生物学者や生き物の好きな人が持っている価値観では、生き物が大事じゃないんです。「生き物が絶滅危惧種だから守らなきゃ」そんな言いながら、ここでも地元の人が疎外されている。やはりこの地ですつと暮らしてきた人たちが、関わりながら、利用しながら、結果として守るということから生まれた知恵をちゃんと記録にして、次の時代に伝えることをやらないといけないと考えたわけです。

子供達の遊び場はどうなるだろう。コンクリートの川よりも、生き物がいる川であって欲しい。でも、生き物がいるだけではなく私たちは、やっぱり、子供がいてほしい。私は特に母親でしたから、子供に遊んで欲しかった。うちの子供たちは、土日はいつも琵琶湖めぐりでした。やはり最後は人が関わって楽しんで、結果として、生き物も生態も環境も守れるというのが素直な望みではないでしょうか。欧米の価値観とは少し違うのです。

欧米は、それこそアメリカの国立公園の歴史を見れば分かりますが、ここからこ

までは国立公園で原始自然、ここからこまでは人間。自然と人間をしっかりと分ける。人間を排除して原始自然を守るという方法。この国立公園方式は、今ではものすごく批判されています。

アジアはどうですか？

嘉田 アジアも植民地時代はそうでした。アジアのエリート達はアメリカやヨーロッパで教育されていますから、「自然を保護しなくちゃいけない」「人が手を加えてはいけない」という方向に行きがち。最初に葦原に人が関わっていたのと同じように、日本の山でも原始自然はほとんどない。里山が見直されたのは、非常に日本的なことだと思います。比良山の山頂のスキー場を造るといった時に、自然保護団体が反対しました。あれは原始自然だから残さなくちゃいけない。湿地帯があつて、杉があつて。私たちはとにかく現地に行かなくてはと、比良の山頂の所有村である、北比良という集落に聞きに行っただけです。「あの山の上の湿地、何かに使っていませんか？」「あれ、もともとわしらの田圃や。減反で、放棄した」

(笑)

嘉田 予想していた通りですよ。「あそこにある自然保護団体が言っているものすごい形をしている木、あれ何ですか？」と言ったら、「あ、あ、あ、まっすぐした杉いっぱいあつたんやけど、あれは切り出して全部使

うてもうてん。今あるのは使いものにならんから残したんや」

(笑)

嘉田 それを自然保護団体は地元の人に聞き取りしないものだから、原始自然としていたわけですよ。同じ様なことが、屋久島や白神山地でもありますよ。やっぱり、そこに永く住んでいた人をまず尊重してほしいですね。それこそ、何百年、何千年いけば先住民で苦労して自然とつきあってきた人の意見を聞いて、暮らしを尊重もしないで、バツと暴力的に自然保護だ、というのは失礼ですよ。

地元の人々から最初に勉強させてもらう。「先祖様からどう関わってきたんでしょか」ということを思い出してもらって話をしてもらおう。

その中から、地元だつてあのまま放置していいとは思っていないし、どうにかしたいと思っているけど、世の中はいろいろ流れているし、どうしたらいいかわからない。意志決定できないわけですよ。そのプロセスを共有しながら、地域社会としてどうしているのかということも、よそ者はオズオズとオズオズと、「こういう方法はどうですか？ホタルもいいんじゃないですか？魚もいいんじゃないですか？」ということも、オズオズと話をしていきたいと思います。それが生活環境主義なんです。それを思い出してもらおうのが博物館のひとつの役割とも思います。

生活環境主義から言つて、今の「いわゆる環境教育」というのは、非常に偏った

嘉田 理科教育の押しつけになってしまふ傾向にありますね。地元の人々が疎外されてしまふ。

ホタルダス調査

そこで、ホタルの調査も、地元の人々の話をまず聞くことから始めていますね。

嘉田 「水と文化研究会」という会を一九八九年に仲間とつくりました。最初のホタルダスの調査表を見て下さい。第一号の調査票に、ホタルの分布を書いてもらうのと同じくらいのスペースに、ホタルの思い出を書いてもらっているんですよ。ここだったら、誰でもみんな書けるでしょう。つまりひとりひとりが参加できるようにしたわけです。それを、みんなが書いてくれてこの欄が私は一番おもしろかったし、今でもおもしろい。それを全て一からデータに入れて、報告書にして、報告書の一頁目に参加者の名前を全部入れたんです。それが第一号なんです。それが十号まで。ある見通しがあつたんですよ。多分みんな、これ配られた時に、自分の名前探さだるうなつて。

小坂 探しました。(笑)うれしかった。

嘉田 それからみんな思い出を市町村別とにかくそのまま全部入れて、本にしてお

返しをした。それで、ここにあなたがくれた意見がこういふふうになります。そうすると「あ、そうか。他の人はこういう風に言っているのか」といつて見えてきますね。へたに取りまとめない。生のまま。ただし、匿名希望の方がいますから、調査表には匿名希望の選択肢を入れています。

小坂 ここを開けたら、もうズラッと千人、二千人の名前が全部もれなく書いてあるんです。

嘉田 あの名簿を作るのは大変やった。(笑)名前まちがったらあかんし。

小坂さん 最初、「水と文化研究会」から、ホタルをやりましようと言われた時は？

小坂 私は新聞に掲載されている記事で見つけたんです。おもしろそうやな、住民参加で書いてあるし、どうやって参加するかなどという、まったく今までにない未知の調査ということで、思わず申し込んだのが一番最初のきっかけです。

何に惹かれたんでしょうか？

小坂 面白そうだ。住民参加という言葉じたいが、初めて聞いたんです。

嘉田 なかったよね。

小坂 だから、どういふふうに参加をするのか知りたくて…

それは何年頃ですか？

小坂 平成二年(一九九〇年)です。滋賀県下でこつこつ調査をやっている。住民参加。どういふ所でその意味が出てくるのか、まずそこに興味がありました。ホタルも、私自身が田舎で両親と田植えの後一緒に、「ホ、ホ、ホタル来い」と言つて帰つた記憶があつたから、「ああ、そんなやつたら、ちょっと最近そつといえれば見かけてへんな。一回見てみようか」といふ、そういう思いがあつたりして。そんなことで、やり出したんです。でも、住民参加でも参加の意識が伝わってこないし、一人でいつも同じ川に出かけて、「ホタルいた、いやへん」といふのを書き込んで帰ってくるだけ、そして調査し終わつて事務局に調査票を送り返して。ところが、報告書が送られてくると参加した人の名前がズラッと、「これが参加や」と思つて。それを見てみると、同じ思いでみんなが調査したというのがコメントとして書かれてあるし、「これが住民参加というんか」と、そんなことでおもしろくなつたんです。そして、一年たち二年たち「また、やろう。また、やろう」といふ意識が、十年という継続調査になつたのです。

小坂 十年間でのべ三千四百人の参加ですね。日数にして四万五千日くらい、みんないるんことを思いながら、ホタル観察に通い詰めたといふんですか。そのデータが一号から十号まで。その集大成が、

『みんなでホタルダス』(注2)です。

嘉田 当時、二つのメディアを考えました。ひとつは、郵送。もうひとつは、パソコン通信です。パソコン通信は対話型で、「今日見てきたわよ、あそこで」「じゃあ、明日私も行くわ」という感じでした。パソコン通信に参加していた人が百人ぐらいいたかな。ホストは琵琶湖研究所の、大西行雄さんという方。ほぼ二人がフルタイムでした。ね、ホタルダスの世話をする人が。

毎日三十通ぐらい来た通信の中に、「見に来い」とあつたら見に行きたいし、「ホタルの伝説ない？」とあつたら調べたくなるし、あるいは誰かに「調べて」と呼びかけた。

だから、夏はホタル。冬は雪。「蛍雪作戦」と言っていたんですが。この蛍雪作戦を大西さんと私で、琵琶湖研究所で三年間やりましたね。で、その時に、こういふことをきっかけに博物館のようなことができるんだとかなり自信を持ちました。

というのは昭和六十年(一九八五年)と六十二年(一九八六年)頃に博物館をやりたいと言って、琵琶湖博物館の構想を出しています。それはさっきの知内の経験が原点です。なんでこんなに忘れられて、伝えられていないんだろ。それから、もう一つは、昭和五十九年(一九八四年)に、『世界湖沼会議』があつたんです。『世界湖沼会議』があつて世界中から人が来るのに、琵琶湖のことを知らせる場所がなかったんですよ。

住民による調査は

地域の通奏低音

ホタルダスの話に戻りますが、集めた調査票を、住民参加ですから、みんなでわいわいまとめたりすると思うのですが、そのステップを教えてください。

嘉田 それは世話役という人たちでやりました。

世話役が地域のリーダーになって、集めた調査票を見ていろいろ話をされるのですか？

嘉田 そうです。その思い出が面白い。だから、まとめて本にしよつとしたわけですから、それと、パソコン通信がおもしろかったですか？

当時、パソコン通信はそれほど普及していませんでしたよね？

嘉田 完全に先駆者です。300ボー(baud)(注3)の時代からこの調査のために、入りましたから。つまり、当時わたしたちはメディアを自分のものにしないと、技術主義と自然環境主義で塗り固められているこの地域では、新しい思想は広げられないと考えていたのです。

でも、当時パソコン通信といつと、あまりお年を召した方には使われていなかったのではないですか？

嘉田 だからどちらかといつとパソコン通信は若い男性です。結果的には、若い男性がパソコン通信で、女性やお年を召した方が手紙。私たちはメディアミックスと言っていました。それと新聞社にも協力してもらい、新聞記事の連載もしました。毎日新聞と朝日新聞です。新聞のマスメディアとミニコミであるパソコン通信と、それと旧メディアである郵送と、ファックスは一部でした。そういうような形のメディアミックスでした。ですから、パソコン通信の上で大変賑やかな議論をしていましたよ。それからデータもパソコン通信で送り込んで、その場で地図ができるなんていうことも、大西さんがソフトを自分で作ってやってくれました。

当時でどこまでするのは、すごい方ですね。

嘉田 すこい方です。大西さん、今は独立して自分で民間会社を経営しています。

小坂 パソコン通信見ると、なんか会話しているようで、「カータンなんか」と名前が書いてある。ハンドルネームというのを後で知つたんです。その会話がものすごく双方向的で即時的。

嘉田 「カータン」て私なんです。画面の上では男と思われていた。そこで、自然保護とは何かとか議論しているでしょう。

小坂 私らは、郵送の手段で書くのしか知

りませんでしたから、ものすごい興味ありましたわ。

嘉田 それが、今や自分がやるようになってる。

小坂 何といつてもこの調査そのものが、ものすごくわくわくする。そういう期待感というのが、好奇心というのが。

ホタルダスの参加者の年齢は若い方も多いですか？

嘉田 定着しているのはお年寄りが多いですね。学校ルートなどで入った人で定着している人は少ないですね。学校ルートで入った人達も、高校、大学で離れるんです。こういうテーマから。

それは土地を離れるという意味ですか。それとも興味的に離れるという意味ですか？

嘉田 両方ありますが興味的に離れる方が強い。ファクションと恋愛です。そんな、ホタルなんてじじむさい、ねえー。(笑)

小坂 おじん、おばんという感じ。

嘉田 おじん、おばんや。それは一遍離れていいと思ってるんですよ。

一遍離れて、結婚して、子供産むと、また戻ってくる。



地域の水利利用の調査結果がファイリングされた「水環境カルテ」が、作られた当時を再現したデスクに並べられている。



- 注 (1) 鳥越皓之・嘉田由紀子編『水と人の環境史』御茶の水書房、1984年
- (2) 水と文化研究会編『みんなまでホタルダス』琵琶湖地域のホタルと身近な水環境調査。新曜社、2000年(写真上)
- (3) データの伝送速度の単位。デジタル信号とアナログ信号を相互に変換する時の1秒間の変調回数の単位。現在はこれが十四万以上となっている。

嘉田 結局、かなり予想していたけれど、面白くなりつつあることは、かつては、みんな一人づつね、ばらばらで。パソコン通信の場合はネットワークになりますけれど、事務局に寄せるという感じになります。どちらかというと受け身だったんですけど、

小坂 そつです。

学校は小学校と中学校ですか？

小坂 今やっているのも、その人が個人的に興味をもって、たまたまその人が先生だったりして。子供達にという流れの中で、学校ぐるみで参加してくれたり。調査票も学校単位で返ってきています。

私たちの十三年目の感想ですね。

嘉田 わが家も典型ですよ。親についてこなくなつたのは、息子たちが高校に入ってからかな。長男と次男の二人。今はホタル見に行こうよと言ってもついてこない。だけど、その内、孫ができるようになって、多分行くよ。行く行く言つて。だから、ライフサイクルの中で入っていく必要がある。それで、博物館もそうなんですけども、いろいろの調査とか、それぞれの家族のライフサイクルの中に、それこそ入って、すごく燃え上がる時もある。また静かに引いていく時もある。一種の通奏低音のように準備さえしておけば、関わる人は関わっていく。そんなにワツと火のように燃えなくてもいいんじゃないのかというのが、今の私たちの十三年目の感想ですね。

嘉田 そつです。もちろん株の情報とか、きわめて機能主義的に目的合理的に取られている情報は電子ネットでいいですが、そ

嘉田 やはり電子ネットとヒューマンネット両方セットです。

おつきあいが「気づき」の源
面白かったのは、グループリーダーの方のフェイス・トゥ・フェイス(face to face)のコミュニケーションがないと、信頼が生まれないので、こういう活動ネットワークが広がらないというのは、どこも同じだなということですね。

段々にそれぞれの所で輪が広がっていくんですね。例えば、信楽町の相良さんという方は、信楽町の中で字の会議があって、「ホタルの講師やってくれへん」言つて、講師に行くのに、「ちょっと、わし、ホタルのことわからんから、資料ちょうだい」言つたら、他の人につながる。一種の支部のような、支部とは言わないけれど、あちこちにできつつある。だから、熱心にやる人は、自分がやるだけではなく、地域に広げていく。そうすると、「あの人のやっているとだから」といって、広がっていく。今、核が十カ所位あるかしらね。市町村でやっている所もあるし、学校単位でやっている所もあるし。

両方で補完的に使わないといけないわけですね。



昭和39年の富江家を移築、再現。当時のくらしに「浸る」ことができる。

右の写真の左奥で扉が開いているのが便所。一番右には水路の水を引き込んだ、カワヤと呼ばれる、昔ながらの洗い場と、ローラー絞機付き洗濯機が同居している。



もそもホテルの調査のようなことは、「コミュニケーション型」あるいは、「コミュニティ型の情報なんです。目的はみんなのお付き合い。それで、よく、「調査の結果、どういふホテルの生態のメカニズムが分かったのか」と聞かれるんですけど、「それ以上におつきあいが必要なだから」それで、博物館の方からは、「研究じゃないと言われましたけれどね。」

でも、おつきあいに、人によって「気づき」があるわけですね。

嘉田 人文学をやる人間にとっては、気づき。そのものが研究なんですけれど、生物やの方々にはわからない。だから、ホテルダスには研究成果がないと言われるわけです。

小坂 私はこの調査に参加していて、こんなに毎回成果をその時にまとめて、報告書を冊子として送ってきてくれるという調査は初めてだったわ。今まで、いろんなことしても、それっきりで「あれどこにいったんやろ」というのがほとんどの中で、これすこいなあと考えた。だから、逆に三年ぐらいになると、待つてるもんね。まだ来ないかなあと。

嘉田 それは努力だけすればいいんです。原則を繰り返す。まず、頭の所で全員の名前を入れる。それから、必ず頂いた資料・情報はみんなで共有する。これが大原則で、それを外したら水と文化研究会の存在価値がない。それが「参加」の出発点。

でも、それは嘉田さんにとっては、ホテルを媒介にして、「ミニマルなものを、もう一度復活させていこう」ということが目的だったわけですね。

嘉田 はい。そうです。生活環境主義の復権です。

小坂 見えないところで地域がつながったという印象は、個人的に受けました。何となく、「あー、つながったなあ」という。

つながってから、逆に琵琶湖を見るまなざしは変わってきましたか？

小坂 みんなという仲間意識ができました。

嘉田 それこそ今だったら、湖北にいったら長浜やっている宮川さんに会いに行けばいいし、ここ行ったら、あの人にとか……。

小坂 点が線とか面になるような感じがあります。

とにかく現場に行く！

嘉田 この後、水環境カルテをやりまます。水環境カルテは六百集落の水の調査です。

最初から水環境カルテのようなものをやりたかつたんですけど、昔の排水の仕方とか川縁に階段が三段あっただけで、そこから物語を紡ぐというのはとっても大変なんです。ほとんど誰も興味を示してくれませからね。ホテルだから新聞で応募しよう

と思っただけれど、「昔の生活用排水を調べましよう」で誰が応募してきますか？

それで、私、あちこちで講演に行っていましたので、講演に行った時に質問をしてくるような、元気な方のリストをもっていたんですよ。それは、かなりの部分は石炭運動の人たちです。それとホテルダス調査の熱心な方、この人たちだったら、次は水環境カルテのような地味な仕事でもできるかなあと思っただんです。だって、ホテルがいる所は水が大事だ。じゃあ、水を調べようとながりますでしょう。

次は、それをつなぎ合わせる仕事が出てくるわけですね。

嘉田 そうです。それが今、冬と夏の水かさを比べようという「水かさ比べ」に発展しました。ホテルと水環境カルテをつなぐのが、「水かさ比べ」です。水量、季節によっていろいろと水の流れ方が違う。昔はここで洗い物をしていた。それは明らかにここで水が流れていた。でも今は水がない。洗い物もできない。水環境カルテでは、生活の中で水を使うということがなくなっている。一緒に生き物もいなくなる、生き物がいなくなると一緒に子供もいなくなるという一連の流れが見えてきました。

小坂 私達は水の量とホテルの分布が関係していることが分かってはいたんですが、まだデータにできなかったんですね。そして、守山市の四つの中学が一緒になって、カワニナの分布と水利灌漑システムの違い



子供たちが触って遊べる「ディスカバリールーム」。ザリガニの中に入って、ザリガニの気分になれる。(上)

いろいろなテーマのおもちゃが箱に詰まっており、「ハンズオン」で楽しみながら、琵琶湖のことを「発見」することができる。(左)



とホタルの分布を調べてくれました。ホタルのいる所は、河川の水が冬でもある。灌漑されている所で、ホタルのいない所は琵琶湖逆水。これは見事でしたね。農業する時にだけ水を流す所にホタルはいない。

嘉田 農業用水が目的合理的になった時にホタルはいなくなる。それで、よく「農業が」と言うでしょう。ただ、やはり、水質以上に水量ではないかということも、気にはしていたわけです。それは、途中でいろいろと現場を見にいきますでしょう。例えば、湖北のびわ町という所から報告があった、「農業用水路にはホタルがいないけれど、排水路にはいる」と言ってきたんですよ。それで、一瞬、用水路の方が水がきれい、排水路の方が水が汚いと思うでしょう。現場に行ってみると、用水路は田圃の上の方であって、U字溝なんです。排水路は、下側であって、雨水もあって、排水路はお金もつたないんで、三面コンクリートにしていなくて、側面二面だけで下は砂がいっぱいあり、雨水とかがじぶじぶ溜まり水があるんですよ。「これ、単純だよ。こっちは水が無いんだもん。ホタルがいようがないよね」排水路は冬でも水がじぶじぶしている。「水質やない。水の有無や！」

これは行ってみたいとわからないですものね。

嘉田 そうです。だからフィールドワークが大事で、とにかく現場に行く。話を聞く

どんどん動き、自分が行けない時には、それこそ仲間がいるから、行ってもらう。パソコン通信でも電話でもネットワークがある。その「気安い」おつきあいの上にあるので遠慮せずに、お互いにいるいる頼めるんですよ。この、人のネットワークが何をやるにも一番大事。

小坂 十年やってくると、仲間というか、大げさないうと同志、だんだん綱が太くなっていくというのかな。

関わる^トことができる^ト博物館

この琵琶湖博物館を見て驚いたのは、調べたプロセスから展示されていることです。

嘉田 「プロセス展示」です。

それと、エスノグラフィの手法をそのまま応用されていること。

嘉田 「浸り展示」と呼んでいます。時代や状況にびつたり浸ってしまつこと。それも、クソリアリズムに徹する。実際に、農村展示の中のお便所で、クソした人が三人出ましたから。(笑)有名な話ですが。

「こつした展示の企画には、地元のみなさんは関わっていらっしゃるんでしょうか。」

嘉田 大いに関わってもらっています。た

とえば「みんなの声を聞いてみようよ」と。ホタルダスの八十人インタビュウのコーナーがありますけれど、これは水と文化研究会の中心メンバーの荒井紀子さんと、小坂さんの前に事務局をやっていた田中敏博さんの二人が、半年間かけて取材に行ってくれたんです。そうでないと、八十人の声を聞くのは大変でしたから。

小坂 インタビュウに、田中さんと荒井さんが私の所に来てくれたのが、私がさらに深く関わるきっかけとなったんですけど。まあ、琵琶湖博物館というが、「水と文化研究会」にはめられたなと思うのは、私「関わる」という言葉に弱いんですわ。「関わる」というのは、生死も共にすると、私の中では認識しているから。これを逆手にとられた(笑)。

嘉田 そや、私たち思うつぽやった?(笑)。コミットメントですよ。今、環境教育で一番大事なのはコミットメントです。コミュニケーションとコミットメント。そのコミットメントがきつくなり過ぎるとだめなんです。義務になつては、もともとが楽しみのためにやっているのに、義務になつたらいけない。できる範囲内で、楽しめる範囲内です。

オビニオンコーナーやディスカバリーコーナーは面白かったですよ。

嘉田 みんな反対されましたよ、最初は。ディスカバリールームは、地元の守山に、

子供博物館運動というのがあったんです。この運動をしていた斉藤スーザンさんというアメリカから来ている人がいました。私、アメリカの博物館を八十八年に子連れで見に行った時に、子供達がちゃんと動かすハズオンに面白がったのです。あれがほしいなと思った。それでずっとアンテナを張っていたら、斉藤スーザンさんが子供博物館運動をやっていると聞いて、それでスーザンさんの所に行つて、「琵琶湖博物館に協力してください」といって、子供博物館運動に携わっている方に組織的に関わっていただいた。

斉藤スーザンさんは、どのアンテナに引っかけたんですか。ホテルダスですか？

嘉田 いいえ、それは新聞を見て、直接電話しました。

やはり、そういう動きをするファシリテーター(注4)というのがキーポイントですね。そういう方がどうも不足していると言われていますが。

嘉田 うちの博物館でも、次の若い学芸員が、どこまでファシリテーターになれるかが課題です。誰かが、ファシリテーターになってくれないと。例えば、生物専門の人、川に行き生き物を見るけれど、そこにいる人になかなか話が聞けない。田圃に行つて田圃の生き物を見るけれど、田圃の所有者に話を聞けない。だから、若い人に

「田圃では何見てきた。ここの所有者は誰で、いつ水を入れて、いつ水を抜いているか、ちゃんと聞いてきた？」と聞くと、「そんあの僕の仕事じゃないもん」。これは難しいことではないんですよ。その気になれば、日本語で話ができるんですから。行政も研究者も似通つていて人に興味が向きにくいのです。



床面には、琵琶湖周辺の写真地図。その周囲に並んだ、昭和20年代～現代までのモノ、モノのオンパレード。

ここで何を聞くべきなのかという常識が親から伝えられずに、思い至らなくなっている人も多くなっている気がします。「ホテルダス」のように、まず土地の人に聞いてみるということが、「気づき」を呼び起す大きな役割を果たしていると思えますが。

小坂 例えば歩いている時、何かを見つけたとします。「これは何やる」と疑問に思い、「分からなかったら聞いてみよう」と素直につながっていく。そして、聞いてみると話が他の所にも膨らんでいく。だから、「歩いて、見つけて、聞いてみる」そのままでいくと「面白くなってくる」はずですよ。

嘉田 今、お年寄りの方は、「自分の昔のことしゃべっても若い人は聞いてくれんし」と、ものすごく遠慮しているでしょう。でも、そういう所について話を聞くと、「『おや』話聞いてくれた」と喜んでくれる。

小坂 今、志賀町内のある一人のお年寄りに聞き取りをさせてもらっていますが、したら、その家のお嫁さんが、「おじいさんの一代記を全部聞いてもらった」というので、定期的に、ずーと、その人の生まれた時から、どついつ暮らしているという話を、もちろん暮らしと水との関わりを含めて、聞きとらせていただいています。

嘉田 そのついでに一代記を聞かせてもらう。生活史ともいいです。子供でもいいですね。こつこつ関係をこれからどんどん作

ていきたい。「また宿題与えられた。わしもぼけてられん」となると、張りが出るし、こつこつうれしいし、みんないきいきしてきます。だから、思わぬ所でいろんな効果があるのかな。それがまとまったら、また博物館の方で展示させてもらうとか、できたら本にするとかね。あるいは展示交流員の方に、「現場で何を語っているのか教えて」と言つて本にするとか、フィードバックを作つていきたい。必ず自分たちに返ってくるものがありますから。日本は水の文化の豊かな所です。こつこつ蓄積は、単なるノスタルジーという意味を越えて、二十一世紀の水不足の時代、国際的貢献にも繋がると思いますよ。

小坂 水というのが人と人をつないでくれているんですね。そういう意味では、水というのは「関わり」ということに、ものすごい役割を果たしているんだと思います。



(4) 人々を結びつけ、参加意識を引き出し、目的達成へのプログラムを作ったり、活動をまとめていく専門職。まちづくりや、市民活動の領域でよく用いられる。

編集後記

ありがたいことに、いつも、みなさんからたくさん励まされ、「こういうテーマを扱ってほしい」とのリクエストFAXをいただきます。水への関心の確実な高まりが感じられますが、意外と少ないのが「水の分配ルール」への関心です。水資源を考える上で欠かせない領域として国際的にも注目されている分野で、まさに地域毎に異なる「水の文化」が問題を解く鍵となります。

水の文化を育てていくためにも、くらしの視点からとらえた水への様々な眼差しを子供達に伝えていくことがたいへん重要です。水に関する世代の記憶をつなぐ努力を、いましてなければ…。インタビューでのお話をつがった率直な感想です。

ミツカン水の文化センター機関誌

「水の文化」第7号

発行日 2001年(平成13年)2月

発行 ミツカン水の文化センター

〒475-18585 愛知県半田市中村町2-1-6

株式会社ミツカングループ本社広報室内

電話 0569(24)5087

《お問い合わせ・ホームページアドレス》

ミツカン水の文化センター 東京事務局

〒143-10016 東京都大田区大森北2-2-10・4F

電話 03(5762)0244

FAX 03(5762)0246

<http://www.mizu.gr.jp/>

ミツカン水の文化センター